

第13回 蘇東坡は皇帝に向かって勝負手を放った

——高論に^{したが}徇いて至情に逆らい、空名^{くうめい}を持して実禍^{むか}を邀える

2017年12月26日（火）。

「昨日、浅草に行ったんだよね。寄席に行くって前からいってたもの。それで、コーヒーのおともに、出てこないのかなあ、あんこ玉とか芋ようかんとか人形焼きとか切山椒とか……」

「そうですね、なんかあったらわたしもううれしいのですが、時間がなくて何も買えなかったんですよ」

「なんだあ、つまんない。きっとあると思って、ねらってきたんだけどなあ。そ

それは仕方ないとして、寄席はどうだった？ 知り合いの知り合いの知り合いみたいな人が、夜の部のトリだったんだよね」

「だから行ったのですけど、『えっ、どうして？』って思うくらいに、わたしのお気に入りの人たちばかりが出てきて、もう大興奮でした。しかも、真ん前に座っていたおにいさんが、箸がころがらなくても笑うくらいにノリのいい人で、こっちも負けまいと大いに笑っちゃいました。いまも楽しい気分が持続しています。イノ君もどうですか、たまには行ってみませんか」

「さあ、それはどうかなあ。電車に乗って東京に行くより、波に乗っていたほうがずっといいもの。叔父さんがボクといっしょにサーフィンしてくれたら、1回くらい寄席に付き合っただけでもいいかも」

「波はどうも……波にもみくちやにされるこわーい夢を見て、はっと目覚めるこ

とがあるくらいなので……小さいときに実際にそんなめにあっていて、一種のトラウマなのではないか」

「叔父さんはどっちかっていうとろくさいほうだから、海で溺れるようなことをされても困るから、イスの上で笑ってんのが安全でいいのかもね。で、お気に入りって、どういう感じの人たち？」

「そうですねえ、具体的にいうと、芸術協会系の人たちってことになるでしょう。なんか波長が合うような気がするのです」

「芸術？ 寄席の話なんだけど」

「寄席で演じられるのは、落語も講談も漫才も漫談も物真似も、みんな実は芸術なのです。かつて寄席に出演する芸人さんが集まって日本芸術協会というのを作り、その後、落語芸術協会と名を改めて、現在では、東京の寄席芸人さんは、落

語芸術協会、落語協会、円楽一門会、落語立川流、漫才協会のだいたいどこかに属しています。私が好きな人たちはなぜか芸術協会の方々が多いのです。芸術協会の方々ならば**全員**がいい感じに聞けるのですが、落語協会となると、いいなあと**思う**のは、しゅんぷうてい いっちゃん春風亭一朝一門とか**三遊亭**さんゆうてい えんじょう田丈一門くらいで、えんちく円楽一門会や立川流に至っては……」

「ちよつと待つて。団体名とか個人名とかを具体的に挙げられても、こっちはもともとなんにも知らないから、さっぱりわかんないよ。叔父さんの好むところを、抽象的にわかりやすく説明してくんないかなあ」

「そうですねえ、規範性よりも個性を、完成度よりも進展性を、正統よりも異端を、品のよい笑いよりも馬鹿笑いを、より好ましいとするといったらばほぼほいいでしょうか」

「ふーん、いまの二択の並びを聞くと、叔父さんらしいのかなあって気もする。そういえば、抽象的にわかりやすくってというのは、叔父さんから教わったように思うんだけど、ちがったつけ？」

「そういうしゃれたことを自分のオリジナルでいえたらカッコいいでしょうね。」

これは、ある著名な数理工学者から聞いたのです。かつて出版社に勤めていたころ、もう30年以上も昔です。その数理工学者によると、教授会か何かで、ごちやごちや議論がもめてきたときに、ある数学の大先生が、

『ここは抽象的にわかりやすく話をしましょう』

と、発言したのだそうです。

多くの人は、数学者が例によってなんかおかしなことを言い出したという反応だったのですが、数理工学者は、けだし名言であると感じ、その後ことあるごと

に『抽象的にわかりやすく』を喧伝して、わたしにも教えて下さったのです。わたしも本当に名言だと思っています」

「フツ―は具体的にわかりやすくとかいうけど、具体的ということは、つまりはそこにあることそのまんまで、知恵をろくに使っていないってことだから、わかりやすいはずがないんだよなあ。

でさあ、思うんだけど、ト―バー君っていう人は、『抽象的にわかりやすく』っていうのを得意としているのかもね。だけど、さっきの二択の並びでいうと、叔父さんの好まない系列のほうの人だったりしない？ 蘇東坡っていう人はホントはとつても偉かったんだよね」

「蘇東坡を正統派の御本尊のように崇めるのは、もしかすると誤解ではないかとわたしは思っています。ト―バー君は敢えて旧来のイメージを打ち砕くような感

じで話をしている、落語芸術協会系の芸風であるといえなくもないかな？ トーバー君は自己の体験を話しているということなので、その語りが芸なのかっていうと、それはまた一考の余地がありそうですが」

* * *

① 前回は、「同胞兄弟見殺しか」の歌に叱られて都に行く決心をし、郷里を離

れたところまでお話しました。眉山びざんを発ったのは熙寧元きねい（1068）年10月で、

ほうしやう ちょうあん

その年のうちに鳳翔ほうしやうを経由して長安ちやうあんに至りました。ちょうど4年前に鳳翔での任務を終えたときと同じように長安で年を越し、都に着いたのは翌年の2月でした。

——ということ、5カ月間ぐらいの旅だったってことだね。郷里に帰ったと

きにはたしか1年くらいかかったんじゃないかな。ずいぶんと違ふもんだね。

㊦ あのとときはゆっくりし過ぎました。その間に何をしていたのかということとは

特にお話しませんでしたけれど、私が都に着いて1年半ほどしてから、帰郷の旅の間に密かに商取引に勤しんでいたとの疑いをかけられることになりました。

それまでに私は、王安石が主導する改革と真つ向から対立することになり、私

おうあんせき

を敵視する人達が、『週刊文春』ではありませんけれど、あることないことあれこれほじくり出して攻撃して来ました。父の喪中に、しかも旅の費用を皇帝から頂戴していながら、ちゃっかり金儲けなどをしていたら、人間性が問われます。父はもとは商人でありましたし、旅の期間は不自然に長く、馬正卿が私のために何かと知恵を働かせてくれていましたから、批判する側が付け入る隙が皆無とい

ばせいけい

う訳ではありませんでした。私は敢えて一切の弁明をしないで、捜査官が派遣されて私の旅の跡を詳細に調査するのに任せました。

——えーと、弁解するとかえってどつぽにはまってしまおうってことかな？ で、
どういうことになった？

㊦ その結果は、時間順にお話してからということにしましょう。

——いきなり予告編？ 今夜はこれで終わり……ってことではないよね。

㊦ 話を戻しますと、眉山を発って、かつて3年間を過ごした鳳翔に立ち寄り、

数日間滞在したのですが、宿舎には朝から晩までひっきりなしに人が訪ねて来ました。あまりにも大勢であったために、失礼ながら長々と待たせたあげく、たった一言二言かわしただけというようなことにもなってしまうました。訪問客の中には、とにかく私に会ってみたいと、全くの初対面という人もいて、後にある程度親密になったある後輩は、「宿には、とにかく中に入って一目でもいいから見ようとする者が詰め寄せていて、ようやく望み見たその姿はまことに雅で、まるで仙人のようであった」というようなことを書き記してくれています。

——ホント？ トーバー君のおっかけみたいなのがいたってこと？ そうやってライチサワーを呑んでいるのを見ると、少しも雅じゃないんだけどなあ。むかしみやびやま雅山っていう大関がいたけど、そっちなら似てるかも。もしかして、仙人のイメ

ージって、ボクが思ってるのとトーバー君の時代の人たちとは違うってことがある？ このごろ片岡鶴太郎さんがめっちゃヨガに凝って、すっごくスリムになって、仙人ってああいう感じなのかなあって思ったりするんだけど、そうではなくて、逆にマツコ・デラックスのほうが近かったりする？

㊦ 我々の感覚だと、「痩せた豚より太ったソクラテス」というところでしょうか。

——なんのこと？

㊦ 古い話なので、ご存じないでしょうね。この前の東京オリンピックが開かれ

た1964年のこと、3月に行われた東京大学の卒業式で、大河内一男おおこうちかずお総長が「肥った豚よりも痩せたソクラテスになれ」と卒業生に向かって話したのが、当時非常に評判になりました。それは、J・S・ミルの「満足した豚であるより、不満足な人間であるほうがよい。満足した馬鹿であるより、不満足なソクラテスであるほうがよい」という言葉の不完全な引用だったようなのですが、「太った豚」と「痩せたソクラテス」の対比が鮮やかで、印象的だったのでしょうか。現代の日本社会では、健康志向の高まりで、スリムであるのが望ましいという傾向が強くなっています。しかしながら、古い中国では、仙人ががりがりに痩せているというイメージはありませんでした。「痩せた豚」はそれこそ悲惨なだけで、思索にふける「太ったソクラテス」こそが理想に近いと言えるでしょうか。

——こないだ横綱日馬富士はるまふじが引退したけど、暴力事件さえ起こさなければ、日馬

富士は「太ったソクラテス」の理想形に近かったのかな。弁護士弁護士の資格を持ち、大学院に進学し、絵も上手なんだよねえ。なんでもできちゃうっていうのはトバー君に近いところがあつたりするかな。日馬富士がトバー君並みにお酒が弱かつたら、きっと引退なんかしないですんだらうなあ。もったいないよね。

㊦ 鳳翔では連日、大勢の人に会ったのですが、顔を見られず、話題ばせいけいに上ることもなかった2人の人物が特に気にかかり、鳳翔を離れるに際して、馬正卿ばせいけいを煩わして調べてもらいました。1人は前にお話したことがあるので、誰であるのか当っていたかきましようか。

——ん？ いまちようど太ったソクラテスになる準備としてホツケの身をほぐすのに一先懸命だったんで、急に抜き打ちの小テストみたいなことをされても困るんだけど。えーと、いまの問題は、トーパー君が最初の官僚暮らしをした鳳翔で知り合いだった人のだれかを答えよってことだよな。聞かせてもらったことを、右から左に忘れてしまおうとまではいわないけど、そんなによく覚えているわけでもないんだよなあ。えーと、一番印象が強かったのは、あのパウハラ知事さんだったかな。名前は忘れちゃったけど。それと、その息子もいたよな。馬に乗ってさっそうと現れて、トーパー君の目の前に逃げてきた鳥を矢で射ぬいたんだよな。それ以外には、その前の知事さんとか、あやしい薬をくれた坊さんとか、いま思いつけるのはそれくらいかな。

㊦

十分によく覚えておられます。話をした本人として嬉しく思います。答えを明かすと、陳希亮ちんきりょう知事の息子の陳慥ちんせうです。陳知事本人は、私が鳳翔での任期を終えて都に帰還してすぐ後に亡くなっています。思えば、陳知事は、最後の仕事として、私をいっばしの官員として鍛えて下さったのでしょうか。陳知事がいなければ、私は危うく独りよがりで、実務に疎く、民衆にとって迷惑なだけの官僚になつていたことでしょう。

陳知事には何人かの息子がいて、陳知事の亡き後にそれぞれがどうしたかということは、ある程度は知れたのですが、陳慥については何も聞こえて来ませんでした。鳳翔に来れば何か手がかりがあるのではないかと思つていて、それで馬正卿に調べてもらったのです。

——だんだんと記憶がよみがえってきたけど、「窮鳥懐に入れば」だっけ、なにかあったときには助けるけれども、そういうことがなくて、もう会わないほうがいいみたいなの、かなりカッコつけたセリフを残して別れたんじゃないかな。第9回。だったら、トバー君が特別に困っていないのなら、その人には会えないってことだよ。

㊦ 鳳翔滞在中には、陳知事が造った凌虚台りょうきょたいに登り、もしかして以前と同じように陳慥がふつと姿を現さないものかと思ったりもしましたけれど、そういうことは起こりませんでした。

——心に期待するものがあるときって、たいていそうはならないよね。逆に、期

待しないでいたら、そうなるかっていうと、そういうわけではないんだけど。とにかく何かがおこるのは、期待していないときだっていうのはだいたい当たってるよね。だから、何かがおこってほしいと思っていたら、まずはその期待感を消さなければいけないことになるよね。ロシアのことわざに、オオカミのことを思わずに家にまわりを3周したら願いごとがかなうっていうのがあるらしいけど、それって絶対にできないよね。つまり、虫のいい願いごとはかなわないってことなんだろうなあ。

㊦ 陳知事が亡くなってから、鳳翔界隈では陳慥はついぞ見かけなくなり、その後どこでどうしているのか知る者は1人もいませんでした。

気になったもう1人は、初めてお話する人で、その名を董伝とうでんと言います。いま

ではほとんど使われなくなった「ネクラ」という言葉がぴったり当てはまるような人物でした。

鳳翔での3年間の任期の最後の春だったでしょうか、馬正卿とともに官舎から出ようとする、門の脇に1人の青年が立っていました。肩を斜めに傾け、妙な具合に腕を胸の前に交差させ、指先に小さな袋をひっかけ、上体がゆらゆら揺れて、何やらおかしな気配だったので、若干注意をしながらその横を通り抜けようとしてきました。すると、青年はぴよんと後ろに飛び跳ね、体を真っ直ぐに棒立ちとなり、思い詰めたような顔で私を見て、声にならないような小さなうめき声を上げ、その場でぶるぶるっと身を震わせ、どつと突進して来ました。

——へーえ、めっちゃ、あやしいじゃん。もしかして、トバー君に恨みがあつ

て、刺そうとして飛び出してきた？ それとも、トバー君のおっかけの大ファ
ン？ ストーカー？

① 馬正卿がさつと青年の前に立ちふさがると、青年はまた棒立ちとなり、両手
を振り上げ、

「わたくしは、わたくしは、あやしい者ではございません。決して、決しておか
しな者ではございません」

甲高く叫び、手にしていた袋を頭上でぐるぐる回し、

「わたくしは、わたくしは、ただ、これを見ていただきたくて、持って参っただ
けなのです。どうか、どうか、これを見ていただけませんかでしょうか」

異様に興奮している青年の肩を、馬正卿が押さえて、落ち着かせるようとしま

した。危害を加えるような様子ではなかったので、私は手を差し出し、

「見てほしいとおっしゃるものがその中にあるのでしょうか」

青年は袋を掲げて前に差し出そうとし、しかし、急にどぎまぎして、挨拶をしようとして頭を下げてみたり、地面に膝を付こうとしてみたり、いくつかの動作を小刻みにいずれも中途半端にするばかりで、どう振る舞ったらいいのかわからないような様子でした。そして、

「ああ、こんなものは、こんなものは、どうしようもない。どうしようもない」
顔を真っ赤にして叫び、

「いっそ、捨ててしまった方がいい。そうだ、捨ててしまった方がいいんだ」
手を袋に突っ込み、中にあった紙をそこらにぶちまけ始めました。

「ああ、もう駄目だ。もう駄目だ。全ては終わった」

袋も投げ捨て、両手で顔をおおってしゃがみ込んでしまいました。

馬正卿は、あたりに散らばった紙を拾い集め、私に手元に持って来ました。見ると、ごく痩せた独特の書体で詩文が書きつけてありました。

「これを私に見てほしいと」

「いえ、そうではありません。そんなもの、そんなもの、とてもご覧いただけのようなものではないのです。何ということをしてしまったのでしょうか。もう駄目だ。でも、でも、持って来たのです。ああ、全ては終わってしまった」

青年はうずくまったまま泣くような声で言いました。

突飛な行動にとまどいながらも、私は我が父のことを思い起こしていました。

父は、都から張方平ちやうほうへいが成都に赴任して来るとすぐに、それまでに書き溜めていた文章を携えて訪ね、張方平から、

「そなたは是非とも都に上り、その才能を国のために役立てるべきだ」

との言葉をいただき、それを転機に長年の望みを叶えるに至ったのでした  第

11回。

もしかすると、この青年に対して自分が張方平の役をすることもあろうかと、青年を伴って官舎の中に戻り、急いで読んでみました。

——で、どうだった？ いま聞いた感じだと、かなりヘンなのかも。でも、特異な感受性のために、普通の人とは異なるおかしな行動をすることがあっても、作品自体は優れてるってこともあるよね。ジョン・クレアだって、もしかしたら、いや、もしかしなくても、一見するとヘンだったかもしれないしね。

ジョン・クレアの生家を見に行ったときに、生家はそのままにあって感動した

けれど、いまもしもジョン・クレアその人がそのまま現れたら、幻滅だったりするかもと思ったりもしたんだ。

だって、聞いてくれる……

スゲヨシキリ

そこに菅原雀は、枯れた草の茎でちいさな巣を作る、
牧草地の池のそば、木でできた小橋の近くに。

そこは学童たちが毎朝毎晩行き過ぎるところ、

鳥の巣から盗むわざ、悪だくみに熟練した学童たち、

灌木の茂みの全て、丈たけの高い草藪の全て、

鳥が巣を作りそうなところを隈なく捜し回る学童。

それでも母鳥は自分の住処を、長い日々、隠し通し、

(森松健介訳、108ページ)

こんなふうな感じでいろいろな鳥の巢を詠んだ詩がたくさんあるんだ。ということは、ジョン・クレアはしょっちゅう茂みの中に潜り込んだりして、「悪だくみに熟練した学童たち」よりも熱心に鳥の巢をのぞきこんでいたってことだよ。かなりヘンじゃない？ そういうところを実際に見ていたら、その詩を読んでみよ。うかつて、そんな気にはあんまりならないよね、たぶん。

㊦ 青年の詩文は、青年の振る舞いにも似て、かなり特異なものでした。特殊な語彙を多用して非常に古風で、一見して理解し難く、何かしら感想を告げようと思っても、言葉が見つかりませんでした。

——つまり、まるつきりダメってこと？

ⓧ 厳しく批評をしたのでは青年のダメージが大きかろうと、

「本日は所用があり、これは後ほどじっくりと拝見させていただきましよう。あるいは、私よりもこの作品をよりよく理解するであろう者を見付けて、そちらにお返しすることもありませんようか」

そのようなことを言うと、青年は勘付いたのでしょうか、二曲出身の董伝にきよくであると名乗って、逃げるようにして立ち去りました。

——一大決心をして、自分を売り込みにきたんだらうね。緊張しすぎて、一番へ

ンなふうなことになってしまったのかなあ。

それで、古風っていうのはどういうこと？ 古臭くて陳腐だってこと？ でも、

ルネッサンスじゃないけど、昔にもどるようなことが新たなものを生み出すって
 こともあるよね。

㊦ スーパースターの欧陽脩おうえいしゅうは文学の改革を推し進めましたが、新しい散文のス

タイルは実は「古文こぶん」と言われました。あなたのおっしゃる通り、ルネッサンス、

復古運動だったのです。しかし、昔に習うことが必ずしも新しいものを生み出す
 わけではないの言うまでもありません。あまりいいたとえばありませんけれ
 ど、日本でいま新古今和歌集をそっくり踏襲したような短歌を詠んだらどうい
 う感じになるでしょうか。一風変わった短歌だとおもしろがってもらえるでしょう

か。

——ん？ えーと、ボクがこのごろ短歌を読んだりしてるって、話したことあったっけ？ ないと思うんだよなあ。トバー君って、なんでもお見通し？

新古今って、ちよつと魅力的かもっていま思ってたりにしてるけど、それをそっくりまねても、へーえ、ご苦労さんってことで、終わりかもね。戦後の前衛歌人といわれた人たちには新古今を非常に好んだ人もいったっていうのを最近読んだばっかだけど、まねるにしても、現代において創作するんならかの意味が込められていないといけないだろうね。

①

2、3カ月ほどして、青年がまた門の脇に立ち、私を見るなり走り去ろうと

するのを呼び止めますと、

「すっかり書き直したのです。でも、でも、こんなものは、こんなものは、どうにもならないのです」

新たなものを見ると、古風さが一段と強烈で、千年以上昔の人が作ったと見間違えるばかりでした。ひたすら奇矯さを誇るかのようで、青年が何を感じ、何を考えているのか、伝わって来るものはありませんでした。

何か私が言うよりも前に、

「あれからひたすら、ひたすら打ち込んで書いて来たのです。でも、でも、こんなものは、こんなものは無価値に決まっています。そんなことは最初からわかっているのです。僕なんぞは所詮無価値なのですから、何をどう作ったところで無価値なのです」

わっと泣き出し、ものすごい勢いで駆けて行つてしまいました。

馬正卿がその後を追い、いくらか話を聞いて来ました。董伝は科挙を目指して勉強に打ち込み、地方試験を何度か受験しましたが、いざ本番となると、会場の雰囲気呑み込まれてしまうのか、必ず下痢やら発熱やら体の変調を来し、ろくに答案を書くことさえできなくて、一次試験を突破できずにいました。それで、試験によつてではなく、自分が書く物によつて世間に認めてもらうしかないと考え、それはまさしく我が父と同じで、私が鳳翔に赴任して来たのは天の導きと董伝は思ったのでしよう、詩文を書き揃えて持つて来たのでした。

私が董伝にとつての張方平になれたらよかったです、一途に古いものを慕うばかりでなく、現代に生きる人間としての感性を磨くことも大切であるというようなことを手紙に記して送るに留まりました。

それからしばらくして、董伝はまた現れ、

「お教えに従い、精一杯出せる限りを出してみました。もうこれ以上のものは私にはありません」

かなり衰弱した様子で、「精一杯」と言うのはまさにその通りであろうと知れました。作品を読んでみると、確かに現代性を盛り込もうと努力したということは伝わって来ました。しかし、この青年の個性のきらめきを感じ取るのは難しく、

一方で、青年の健康状態の方が余程気になり、養生についての若干のアドバイスをして帰ってもらいました。

私が青年の作品に感心するところはあまりなくても、少しでも青年の努力に報いようと、特殊な語彙を縦横に駆使できるのは一つの才能で、もしかすると一定の評価をしてもらえることもあるのかと、関心を持ってくれそうな人に宛てて都に

送ってみました。

しかし、これといった反応はなく、間もなく鳳翔での任期も終り、青年の件はそれで終わってしまいました。

4年ぶりに鳳翔に来て、馬正卿の調べで、董伝は近頃父親を亡くして、郷里の二曲で喪に服しているということがわかりました。貧苦のため、父の遺骸を寺に預けたまま埋葬できずにいるということであつたので、同じような境遇であつた馬正卿が強く同情を示し、わずかではありましたが香典を馬正卿に持たせて、二曲の家に届けさせました。

——ふーん。なんていったらいいのか……つまり、生きるのつてむずかしいってことかなあ……なんかひとごとでないような。ボクはジョン・クレアの詩にのめ

りこんじゃったんだけど、その人はその人は勉強ばっかして、試験にはとても合格できないから、自分の作品でと思って、だけど特異なところにのめりこんでしまつて、生活力がなくて……行き詰まつてしまつたんだよね。

㊦ さて、鳳翔を出て12月の終わりに長安に着きました。そのとき長安にはス

ーパースターの韓琦かんきがいました。韓琦は前の皇帝の時代には宰相として剛腕を揮つたのですが、若い神宗皇帝しんせうとの関係は必ずしも良好ではなく、西方への備えを充実させることを名目として都から出て、つい最近に長安に移つて来たところでした。

12月30日、まさしく年の瀬に、韓琦と会いました。石蒼舒せきそうじよと王頤おういも一緒にしました。かつて鳳翔での任を終えて都に帰還した際に、長安で石蒼舒と王頤と交流

があつたことをお話していますが、覚えておられましようか (第10回)。

——えーと、どうだったかなあ。そんなときの旅を楽しんでいたような印象は受けただけど、2人の名前はまでは記憶にないなあ。1度聞いてちゃんと覚えていられるくらいだったら、ボクもバイトで苦労しなかったかも。ここの店で働かせてもらった最初のころ、お客さんの注文を聞いて、よく間違えていたもんなあ。ライチサワーを頼んだのに、マンゴーサワーが出てきたらつつかえすよね。そういうことをしてはいけない意識すると、注文を伝えるときに、なぜか口からマンゴーサワーっていつてしまふんだよ。どうしてそうなるのかわかんないんだけど。

ト

石蒼舒は有名な書家であり書の収集家でした。その友人の王頤は画の収集家

で、前回長安に来た折に、王頤が所有する「執杯持耳翁」つまり「徳利奉行親爺」

しつぱいじじおう

とつくりがぎようおやじ

の画に戯れの文章に書き添えました。そして今回、また長安に来てみると、虎退

治しょうじんの章惇が短文を書き添えていましたので、さらに一文を付け加えたのでした。

——ああ、「徳利奉行親爺」だけは思い出せた。たくさんの人名が出てくるのでとても覚えきれないよ。

㊦ 石蒼舒、王頤そして私が連れ立って韓琦のもとを訪れました。政治向きの話

は一切しませんでした。都では王安石を中心に国政の大改革に向けて動き出して、それに対して韓琦が強く批判的であるのは世間によく知られていました。うかつなことを聞くまい、言うまいと、石蒼舒が得手とする書や、王頤が得手と

する画の話をして過ぎ、せっかくの機会だから何か皆で書き合おうということになり、順番として年長の韓琦がまず筆を執り、その次に王頤が、

「先程から、昔の人の筆法について蒞蓄を傾けて論じておられる君が、私の書なんどをどう御覧になるのやら、それを思うと手が震えますな」

と言いながらも、さらさらと書いて石蒼舒に回しました。

「大先生方を目の前にして、恐れ多くて、とても論評はいたしかねますなあ」

石蒼舒が笑って書き添えると、韓琦は目を細めてそれを眺め、

「私がうっかり最初に書いてしまったのは大きな誤りでありましたな。お二人の書を拝見して、ここで一言申し上げてよろしいかな」

皆が是非と頼みますと、

「お二人の書とかけて、馬の列の先頭で笛を吹くと解きます」

韓琦はにんまりと笑みを浮かべ、3人に順に視線を送って来ました。私達は互いに顔を見合わせ、

「とんとわかりません。して、そのココロは何でありましょうか」

——ん？ いまのは絶対にトバー君の作り話だよね。そんな謎かけみたいなのとを、昔の中国でやってたりしないよね。しかも、宰相みたいな偉い人が。

ⓧ 韓琦は怖い人だとの印象を私は持っていましたから、謎かけは非常に意外な感じがしました。

「おわかりにならぬとあれば申しませうか。そのココロは、よほどの妙手でなければ、敢えて先頭で笛を吹くことはいたしませんということ。下手な私が、行

列の先頭に出しやばってとんだ失敗でありました」

韓琦は声に出して笑い、皆もそれに合わせて大いに笑いました。そして、この経緯をそのまま私が書き添えたのでした。

——いまの謎かけが作り話ではないとして、そんなに笑うほどおもしろいものだったの？ 上司がおさむいダジャレをいったのに、みんなで大笑いしてみせるよ
うな感じ？

㊦ 長安滞在中にはいろいろな人と会い、年が改まってそろそろ出発しようかと荷物を整理していますと、馬正卿が駆け込んで来て、門の脇に董伝が立っていると言っているので、すぐに宿舎の内に呼び入れました。

そのときの董伝どのように表現したらいいのでしょうか。寒空にどうしてそれで長安にまで来られたのか信じられない格好をしていて、言動ははなはだ異様でした。馬正卿が届けた香典について礼を言い、現在の窮状を涙ながらに訴えたところまではまだよかったです、突如として目をぎらぎら輝かせると、

「それでも、わたくしの未来は間もなく大きく開けることになっています。韓かん魏公様ぎがお約束して下さったのです。わたくしを、このわたくしを、朝廷に推薦して下さいのです。もう間もなくです。わたくしには、わたくしには、妻がおられません。婚約の話もついぞありませんでした。でも、韓魏公様がこのわたくしを朝廷に御推薦下さるといふことをあるお方が耳にされ、それはそれは御立派なお方なのでありますが、妹御様をわたくしに下さるとおっしゃっているのです。喪が明けましたら、わたくしは、このわたくしは官職を得て、かつ妻も得られるの

でございます。そうなれば、世に無用な存在ではもうなくなります。全て韓魏公様のお蔭なのであります」

董伝はそう言い放つと、感極まったように号泣しました。

韓魏公とは韓琦のことです。いま韓琦の置かれている状況からして、全くの無名の人物を朝廷に推薦するということは考え難く、そうでなくても韓琦は普段からそのようなことはほとんどしない人でした。私は半信半疑というよりも、疑いが大半で聞いていたのですが、涙が止まると、董伝はぐったりとして、いまは母も弟も皆が飢え死にするばかりだと、生活の苦しさをつらつら訴え、

「でも、それもこれも間もなく終わるのです。韓魏公様のお蔭でございます」

そして、また同じ話をした上で、私からの香典が届いたことで、近所の人に急に見直されたと言い、さらに、自分の詩文が都で評判になっていて、誰それに読

んでもらった、誰それから激賞される手紙が届いたと、いろいろな人の名を挙げ連ねました。私もその名を知る人達でしたが、かつての董伝の詩文を思うと、そのようなことがとてもありそうには思えませんでした。

——うーん、それって、自分の願望がそのまま現実になると思い込んでしまったのかなあ。さつきジョン・クレアの話をしたけど、ジョン・クレアも現実と非現実の境がわからなくなって精神病院に入れられてしまったんで……なんかとつてもつらい話だね。

ⓧ 董伝が言うのは事実とは思いませんでしたけれど、私と董伝とが知り合いと
いうことで近所の人の見る目が変わるのであるのなら、それはそれでいいように

しておこうと、董伝に若干の金品を渡し、次のような詩を贈りました。

たとえ身には粗末な衣服を纏って生涯を送っても、

詩文を納めた腹の内はいつでも華やかである。

行く行くは落ち葉を拾い集めて豆を煮て暮らすような老学者となるのを嫌い、

科擧の合格者の中に身を交えて春の花盛りを満喫しようとした。

しかしながら、春の野を駆け廻る馬を用意する銭が懐になく、

婿選びをする大官が目を止めてくれないかと虚ろにあたりを見回した。

我が意を得られさえすれば、きっと世間に誇れるはずだ。

朝廷に召そうと、黒々と記された詔書が必ずや届くであろう。

——えーと、これはどういう詩？ 董伝の妄想に付き合ってみせたってこと？

励ましの詩？ よくわかんないけど、とりあえずトバー君のやさしい心づかいを感じることはできるかな。そういえば、都に行こうとしていた貧乏な受験生を親切に泊めてやったこともあったよね  第8回。

 私の詩を読むと、董伝はにわかになんか落ち着いた様子になり、

「もう一度、勉強し直します」

そう言って頭を下げ、悄然と宿を去って行きました。その姿を見送りつつ、私は、董伝はすでにこの世の外に出て、その幻を見ているかのような錯覚を覚ええました。馬正卿を呼び、私が旅の間に着ていた毛皮の外套を董伝に与えるよう言いました。

董伝が言ったようなことが韓琦との間に果たしてあったのかどうか確かめることはしないで、その後すぐに長安を発ちました。

都に着いたのは2月の初めで、ほぼ3年ぶりでした。数日もしないうちに、神宗皇帝は王安石を参知政事さんちせいじに任命しました。参知政事というのはわかりやすく言うと副宰相です。王安石を副宰相に据えることで、王安石とともに国政の改革を断行するとの意志を、皇帝ははっきりと示したのです。地位は副宰相であつても、皇帝の強力な後ろ盾を得た王安石は実質的に国政全般を指揮するようになりました。王安石は直ちに、改革に必要な法律を定めてそれを実施するための新たな部署を設置しました。それを制置三司条例司と言います。特別な省庁を作つて、他の官庁から制約を受けることなく、むしろその上に立って大鉞を揮つて改革を行うということなのです。

この頃までに朝廷は王安石を中心とする改革派と、それ以外の非改革派に二分されていきました。当初は王安石を高く評価して皇帝に推薦したような人も、王安石がどのような改革を意図しているのかが明らかになるにつれて非改革派に回ったために、改革派はごく少数、大半が非改革派という構図になっていました。そのため王安石は改革に賛同する若手官僚を引っぱり上げて制置三司条例司の構成員として、非改革派の包囲網を突破しようとした。王安石によつて拔擢された若手の筆頭は呂惠卿ろけいけいという人で、呂惠卿の名はこの後、何度も出て来るようになるでしょう。

——そんなもつて、トバー君は、さつきいつてたように、王安石に反対する非改革派になるんだよね。どうしてかなあ？

㊦ 韓琦を始めとして往年のスーパースターは皆非改革派でした。そちら側の人達は、私達兄弟も当然仲間になるものと期待していました。上京した時点で、私達兄弟は態度を決めています。まずは王安石が何を目指しているのか、先入観なしに知ろうとしました。スーパースターも私達兄弟も元来は国政の改革を目指していたわけですから、王安石と一致するところがあれば改革に進むべきなのです。

さて、政治向きのごことは後回しにして、「游たひの奇絶」の本来の主題の方をお話しましょう。

3月の終わり、董伝が病死したとの手紙が届きました。見送ったときにこの世の人ではないと感じたのは、実は本当にそうであったのかと一瞬思いましたけれ

ど、わざわざ長安にまで行って会うほどに私とは親密な仲であったと聞いているので、特に知らせると手紙にありました。差出人は土地の役人で、董伝の母と弟が遺され、その日の食べ物も事欠くほどに困窮しているといった事が細々と記され、何らかの支援を期待していると知れました。

何かするにしても都は遠すぎるので、思い切って韓琦に手紙を書きました。董伝が言っていたことをそのまま記し、遺族のために助力してほしいと頼みました。

——でもさあ、董伝の勝手な妄想だったんだよね、きっと。韓琦としては、そんなこといわれても、それこそ「そんなの関係ない」ってことなんじゃないのかなあ。

㊦

当時の社会において、董伝のような貧乏な苦学生が社会的に浮上しようとしたら、科挙に合格して官職を得るか、有力な家の婿になるか、その二つを夢見るのが常でありました。董伝は困窮の余り、現実と夢の境がわからなくなってしまうのでしよう。たとえ事実無根の一方的な思い込みであっても、韓琦ほどの人であれば、慕われたからには無視することはあるまいと私は考えました。実際に韓琦は期待した通りのことをし、董伝のことは一応落着きました。

——それと同じ頃に、任にんきゆう佖びが都を発こうしゆうつて黄州に赴任しました。たぶん覚えておられないでしょうけれど、任佖の名は前に一度出て来ています。

——今日はなんだかボクの記憶力を試されているような気がするなあ。うーん、まるっきり覚えてないんだけど。

㊦ 無理ありません。「游たびの奇絶」を話し始めた最初の頃に、長江を船で下った旅について聞いていただきました。そのときに任佖にんしの兄の任孜にんしに会った折の詩をお話しました。任の兄弟は私と同じ眉山県の出身で、兄弟揃って科挙に合格し、当時人々は兄を「大任」、弟を「小任」と呼んでいました。2人とも我が父の古くからの友人で、船旅の途中で兄の任孜と落ち合う約束し、しかし船が着くのが遅れたために、冷たい雨の中で半日程待たせてしまったのでした(㊦ 第3回)。

——なんかそういうことを聞いたような気がしなくてもない……。

それで、いまふと思ったんだけど、トバー君の故郷について前回までにいろいろ聞いたけど、眉山県ってというのは都から遠く離れた田舎の町だね。それな

のに、科挙に合格した人が結構大勢いたんだよね。トーパー君の伯父さんも、お母さんの実家の人たちも、それにいまの兄弟も。眉山県からなぜ大勢の合格者が出たのかっていうのを探求したら、『眉山物語』とかいう映画の一つもできたりしないかなあ。あの豚のお母さんとかが受験生に不思議な力を授けたみたいなのストーリーで……。

ん、でも、いまウイキペディアを見てるんだけど、現在の眉山県って人口が340万人もいるんだ。ぜんぜん田舎の町じゃないじゃん。横浜市なみだよな。うちの町とはえらい違いだ。それで、眉山県はいま6個の区に分かれていて、中心部が東坡区っていうんだね。へーえ、そこところは、うちの町にサザン通りがあるようなもんじゃん。もしかして、東坡サブレーとか東坡最中とかもあったりするのかなあ。

あつ、いつけない。人の話を聞いている間にこんなふうにもスマホをいじってる
と殴られちゃうかもね。トバー君は暴力を使う人じゃないことはわかっている
けど、よくないよね。

㊦ 眉山県から多くの合格者が出たのは、地域全体が勉強熱心であつたというこ
とに尽きるでしょう。昔の英雄、豪傑は、剣を手に故郷を出て、戦場で功名を立
てようとしたわけですが、宋の時代の英雄、豪傑は学問を身に纏って試験場で戦
つたのです。「大任」「小任」はまさに郷里が生んだ英雄で、試験に合格するや否
やその社会的地位が一変するのを目の当たりにして、町の人々はいよいよ教育に
熱心になつたのでした。

——でも、科挙に合格できないと、さっきの董伝みたいなことになってしまっただよね。その違いは相当に残酷かも。

ⓧ 「小任」が都を去るに当たって、その兄の「大任」へのメッセージも込めて詩を贈りました。

にんこう
任公兄弟は我が州の豪傑である。

若かりし頃は、一日に千里を走る馬のように意気盛んで、
人脈など不要と、我が道を歩んだ。

残念なことに、要路の誰かに知られることなく、
その才能が十分に活かされないまま老境に達してしまった。

小任公とはこの前お会いしてから十年、

いまも学び続けて万巻の書を読破し、

その詩はますます美である。

こうしやう

これから行かれる黄州は峡谷に挟まれた小さな郡で、

葦原や竹林の中に、茅葺屋根の家が数軒ばかりあるという。

どのようなところに置かれても、

己の天命を知る者は憂いたりしないものだ。

恥じなければならぬのは賢人を推薦しない者どもだ。

へいせん

平泉県におられる大任公はさらにうら悲しいと言えようか。

六十歳にしてなお書生のような貧乏暮らした。

かつて民衆に慕われた地に葬られたそれでいいとひそやかに願うのか、

それとも、もはや誰に遠慮することなく振る舞うべきなのか、

一生の終わりとどこかを考えておられることだろう。

小任公に託して大任公に我が思いを伝えたい。

凜猛な鷹に向かって、俺にだって爪があると、

威勢を張るようなことだけはなさいませぬように。

——えーと、いまの詩から推測すると、郷里の英雄も、いわゆる「窓際族」みたいなになってしまっているってことかな？ この際、一矢報いようと、上に向かって爪をむいても、なんのトクにもならないから、おやめなさいってアドバスしているんだよね、たぶん。トバー君のほうが年下なんだけど、穩便につて、なだめているんだよね。郷里の豪傑になにがあったの？

㊦ 改革に向かって大きく動き出した政治情勢と関係しているということだけを申し上げておきます。この詩は私の将来を予言していたようなところがあって、このときから11年後に私は罪を得て、「小任」が向かって行った黄州に流されたのでした。そのときに私が「俺にだって爪がある」と虚勢を張ってみせたかどうかはいずれお話することになるでしょう。

——またしても得意の伏線だね。流罪になったということは何回か聞かされていくので、気長に待つとするよ。

㊧ いまの詩がそうであったように、これ以降の私の詩はそのほとんどが人に贈

ったものになります。ジョン・クレアがもつぱら故郷の村で1人孤独に詩作にふけたのとはまるで異なります。

——詩といってもいろいろあるってことだよ。ずっと前に、叔父さんから、あの有名な現代詩人が、東京のホテルに缶詰めになって詩集の原稿を完成させたというのを聞かされて、その詩人がいつぺんに信用できなくなったってことがあったんだ。ジョン・クレアにのめり込み始めていたときだったんで、詩とは孤独な魂の叫び、それも精神の異常をきたすくらいに大変なものだと思っていたから、ホテルに缶詰めになって作るなんて詩ではない、バツカじゃないのって単純に思ってたんだ。でも、いまは詩はもつと多様なもので、だからこそ豊かな世界を生み、人間にとって大切なものとなってきているんだろうなあって考えるようになったよ。

だって、日本の和歌にしても、その多くが公の場で聴衆の反応を意識して詠まれたものだったってことを、ほかならないその現代詩人の解説で知ったしね。

紫草むらさきのほへるいも妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

『万葉集』にあるこの歌は、人妻であるからこそ恋をしてしまうという、禁断の恋を熱く歌ったものなのかと思つたら、ゼンゼン違うんだってね。その「人妻」も、「人妻」の夫もいる宴席で、詠んだ歌なんだってね。つまり、「あんたの奥さんは、人妻であっても恋をしてしまうほどすばらしい」って、メツチャほめたということなんだよ。宴席でどつと受けたんだらうなあと思像すると、楽しい気分になるよね。

㊦ 次の詩は、長江の南の秀州しゅうから都に來た慧空えくうという僧に贈ったものです。先

方の求めに応じてそのとき初めて会ったのですが、一見してなかなか癖のありそ
うな人物で、近頃建てた堂に静照堂せいしょうどうという名を付けたと、その意味するところを
さも自慢げに語って止まらない勢いでありましたので、聞きながら一篇の詩を走
り書きし、僧の目の前にすつと差し出しました。僧はなお語りながら目を凝らし
て、「ん」とうなずくと、口角に溢れ出していた泡を拭い、ぽんぽんと額を叩いて、
「いやはや、かように騒がしいのが愚僧のもともとの性さが。なかなか直らぬもので
ございますなあ」

と、大笑しました。

鳥は囚われても飛ぶことを忘れない。

馬は繋がれても走ることをいつも思っている。

貴僧は堂に「静照」の名を付け、

静かに身の内を照らし見ることの意義を説く。

鳥や馬は、静の中に置かれてじっとしていられるだろうか。

飛びたい走りたいたいとの思いに任せるのがいいのではなからうか。

世間の人は俗事はわずらわしいと言う。

しかし、俗事がなければないで悲しく思うものだ。

世間の人は貧乏は身を疲れさせるので勘弁だと言う。

しかし、富貴になればなったで精神を消耗させるようなことがあるものだ。

貴僧は「静照」を誰と一緒に実践したいのか。

市井に隠遁して、このまま老いて死んでも悔いはない、

何より楽しいのは、小さな舟を浮かべ、それに身を任せることだ、

などと言う人達か。

そう言っている者だって、

時が巡り来るなら世に何がしかの働きをしたいと思っていたりするものだ。

それは貴僧が言う「静照」の仲間ではないだろう。

まして私に向かって説いても何もならない。

——なんだか野心が透けて見えるような生臭坊主に、「静照」みたいなことを説かれても、こっちはその気になりませんってこと？ 相手が笑ってくれたってこと

は、ややきついユーモアが通じたってことかな。ボクもこんど「聖書を読みませ

んか」みたいな勧誘がきたら、なんか詩でも書いて渡してみようかな。

㊦ 同じ頃に、長安の石蒼舒から手紙が届き、かねてから作っていた家の離れが完成し、「醉墨堂」という名を付けたと書いてありました。堂の名称つながりで、その返事に書いた詩を紹介しておきましょう。

人の一生で、憂い患うことが始まるのはいつなのか。

それは、字を知った時である。

だから、自分の姓と名がほぼ書けるようになったら、字を学ぶのはもうやめるべきなのだ。

まして、草書の速さを誇るなど何の意味もない。

見る人の口をあんぐりと開けさせ、

どう読んだらいいのかと困らせるだけだ。

わかっているながら、私も草書をとかく速く書きたがる。

おかしなことをしていると自分で笑ってしまう。

貴公も同じ病で、いつ治るとも知れない。

何しろ貴公はこのように言っている。

「草書ほど楽しいものはない。

心が一切何物にも捉われない最高の境地と同じだ」

貴公は近頃、堂を建てて「醉墨」と名付けたという。

美酒を飲んで百の憂いを消すくらいに、

墨を用いるのは素敵だという意味なのだろう。

蓼食う虫も好き好きで、

泥や炭が御馳走に感じられてしまふ病気があると聞く。

貴公が書を好むのは、なるほどそういうもので、

もしかするとそれどころではないのかも知れない。

何しろ貴公が使い古した筆は一つの丘を作るくらいになっているし、

貴公が興を催して筆を揮ったならば、

駿馬が走り出してたちまち中国全土を踏破してしまふような勢いで、

瞬時に何百枚もの紙が費え去ってしまふのだ。

私はというと、その書には型に基づく法則性はなく、

点や画はただ手の勢いによるので、

読む人にああでもないこうでもないという面倒をかけさせてしまふ。

そんなものであるのに、貴公は評価してくれて、

紙の切れ端に書いた一字だけでも欲しいと言ってくれる。

貴公は、昔の草書の達人に並ぶほどだが、

私は、自分一人でうまいと誇って、世の人の首をかしげさせる下手くそ名人だ。

要するに、池いっばいの墨を使い切るような努力をしていないのだから、

絹などは字を書くために用いるのではなくて、

布団に詠えた方がよっぽどいいのである。

——これも、ちよつとひねったユーモアをきかせたってことかな。字などは名前が書けたら十分だって、トバー君みたいなその世界の達人がいうのが……どうなんだろう、おかしかったりするのかなあ。字を知らなければ、憂いは薄れるの

だろうか。字のなかった縄文時代の人たちだって、憂いを知らなかったわけでは
ないようにも思うけどなあ。

㊦ いまの詩を石蒼舒に送った直後、長安で石蒼舒とともに会った王頤が都に来
て、すぐに別の任地に旅立ちました。別れに際して、何か草書を一つ書いてくれ
ないかと頼まれました。それに応じたのでは、先の詩に矛盾するような気がして、
次の詩を渡しました。

貴公と初めて知り合ったのは長安に近い武功県ぶくけんだった。

冬の役所に泊まって樽酒を傾け、

酒闌たけなわにして灯が尽きてしまったけれど、それでも話は尽きなかった。

従者は立ったまま眠りこけ、ばったりと屏風を倒してしまった。

その時に、貴公は、不死の奥義を学ぶべきだと、熱心に私に説いていた。

瞳が四角い仙人から授かったその奥義を聞かせてくれたのだが、

私は心に悟らずにいたので、

酔っての夢から醒めたら、何もかもわからなくなっていた。

それからというものは、憂患に身を削られ、

心持ちはいつも霜に枯れた草のようなありさまだ。

羨ましいのは、貴公の顔色がますます若々しくて、

外欲に引かれることが少なく、心の内側が充実していることだ。

貴公が言う奥義はこういうものだっただろうか。

「河車かしやで水みを挽いて脳の黒きに灌げ、

たんかく
丹伏を火に伏して頬の紅に入れよ」

都で再会した貴公は、東に行くに際してこのようにぼやく。

「いつになったら籠の鳥の身から解放されるのやら――」

せめて仙薬の原料となる丹砂の産地に赴任できればいいのに、

銅の産地で銭を鑄る仕事を仰せつかってしまったよ」

というようなわけで、離別の情を籠めてこの詩を送るのだけれど、

草書は書く暇がないので許してもらいたい。

――暇がない？ 草書って、さらさらっと書く崩し字のことだよ。さっきの詩

では、速く書きたがるって、いつてたよね。詩を作るほうがよっぽど大変な気が

するんだけどなあ。これもひねったユーモア？

それと、奥義のところはさっぱりわかんなかった。でも、エロイムエッサイム、呪文のようなもので、意味不明でいいってことかな。

㊦ 実際に書く暇もないような状況になっていました。都に戻ってすぐに、弟は、改革のために新たに設けられた制置三司条例司の一員となって、改革のために準備された法案を詳しく検討する仕事を割り当てられ、私は、皇帝のブレーン集団の一員として、官員に渡す辞令書を扱う仕事を授かりました。2人の処遇がこのようになったのは、皇帝と王安石が私達兄弟に期待するところが小さくなかったからだろうと推測されます。私達が改革に賛同するようになれば、大いにはずみがつくということだったのでしよう。

私と弟は、まずは改革の内容を理解しようと努めました。弟の与えられた職務

はそれに最も適していました。多数の法案が用意されていて、個々の法案はどれもこれまでの制度を大きく変えるもので、多数の法案を組み合わせた結果としてどのような国家像が結ばれるのか、その全貌を掴むのは容易ではありませんでした。改革が全体として何を目指すのか、その展望をきちんと議論したいと弟は提案しました。

それに対して、制置三司条例司の責任者である呂惠卿は、

「それはもう済んでいる。君の役目は、個々の条文に不適切なところがないか、条文相互に矛盾点がないか、そういったところを詳しく見ることだ」

と、応じてくれませんでした。

——なんだっけ、「分割して統治せよ」……関係ないかな。現在の改憲を巡る動き

でも、改憲を前提に個別の議論にもつていこうとする人たちと、そもそも改憲はすべきではないとする人たちが対立しているようだけど、政治というのは、そうやって動かそう、止めようとするものだったりするんだらうね。うちの叔父さんがときどき「一点突破、全面展開」っていうのをいうけれど、個別のところを持ち込んで、一つでも穴を開ければ、あとは一気に全部の堤防が決壊するってことになったりするんだらうね。

㊦ 弟が直球勝負の人間であることは前からお話しています。呂恵卿が取り合ってくれないのなら、直接皇帝に訴えようと、改革を根底から議論し直すべきだとの意見書を提出しました。弟はすぐに皇帝に呼ばれ、意見書の趣旨を直接説明しました。皇帝がそれだけ弟を尊重して下さったということなのですが、聞き

入れられるには至りませんでした。

弟の上司である呂惠卿は、己を飛び越えて為された行為に不快感を示し、その後、2人の関係は悪化の一途をたどりました。

——組織ではよくありそうな話だね。で、王安石の改革って、いったいどういうものだったの？ 具体的なことは省いて、抽象的にわかりやすく教えてもらえるといいんだけど。

① 極めて極端に単純化して説明すると、宋という国をいわば「経済国家」に変身させようとするものでした。経済活動のあらゆるところに国家が介入して経済規模を拡大し、それによって国家の収入を増やし、増えた収入を投じてさらに経

済規模を大きくする好循環を生み出し、国家も民衆もともに繁栄して行くということを用意していました。こうして国力を増大させたなら、宋は建国以来、周辺勢力に対して軍事的に劣勢で守りの姿勢を余儀なくされていたのを、攻勢に転じられるようになるということも展望していました。

当時の私達は、国家が介入することで経済の規模を拡大できるという考え方がなかなか理解できませんでした。国家の富は基本的に農業生産に依拠するというのが伝統的な考え方で、国家財政が苦しくなって収入を増やそうとすれば、民衆からの収奪が激化して民衆を疲弊させ、結局は国の基盤が危うくなってしまおうとされていました。国の財政が苦しくなったときは、国の活動を縮小して、少ない収入でもやっていけるようにするというのが黄金のセオリーで、スーパースターはんちゆうえんの范仲淹以来、改革の旗印は、「冗吏、冗兵、冗費」の「三冗」を省いて国を身軽

にし、民衆の負担を減らすというところがありました。弟も「手本は范仲淹」でありましたから、皇帝への意見書の中核は「三冗」でありました。ところが、王安石の考えは全く逆で、国家がどんどん活動して問題を解決しようとするものだったのです。

——ちんまり節約して乗り切るか、大胆に打って出るかの違いってことかな。

① 改革の範囲は、国家が必要とする人材の育成と採用の方法にも及んでいました。これまでに何度も改革が提唱されながら実現に至らず、現時点においても改革に反対する人が大勢いるのは、国が本当に必要とする人材を集められていないからだ。王安石は考え、最終的には、実務に長けた人材を養成する学校教育を充

実させ、学校の卒業試験をもって科挙に替えるべきだとの展望を示して、そこに至る手始めとして、形骸化しつつあった学校を変革し、実務とは何ら関係のない詩賦を科挙で課すのを止めることを提議しました。

このことについて以前に少しだけお話していますが（ 第4回）、王安石のこの提議に私は強く反対しました。スーパースターを始めとして優れた人々をこれまでに輩出して来た科挙を、そう簡単に改めるべきではないと、弟と同じように皇帝に向かって意見書を提出しました。私も直ちに皇帝に召され、思うところを申し上げました。

「朕がかねて疑問に感じていたことがこれで釈然とした」
皇帝はそのようにおっしゃって下さったばかりでなく、

「朕に何か言いたいことがあればいつでも言うがいい」

とのお言葉も頂戴しました。

——へーえ、トバー君は、皇帝に気に入られたってこと？

㊦ 神宗皇帝はこのとき22歳。私は34歳、弟は31歳でした。韓琦は62歳、

王安石にしても48歳でありましたから、皇帝が私達兄弟に親近感を持ったということはあつたらうと思います。

あくまでも憶測の域を出るものではありませんが、皇帝は私をより近くに置こうと考えたようです。しかし、王安石が難色を示したためにそれは実現しませんでした。

次第に私達兄弟が改革に賛同しないということが明確になり、呂惠卿と間が完

全に決裂した弟は、地方官として外に出してほしいと朝廷に願い出ました。その理由として、弟は呂惠卿の資質を問うことなどはしないで、新法に種々の不具合があることを列挙しました。それは王安石を強く刺激したようです。8月に、弟は地方都市の事務次官として都を出て行くことになりました。都に来てわずか半年後のことでした。

私と王安石の間も次第に緊張が高まり、11月、私も臨時の行政府の事務次官として朝廷を出ることになりました。ただしそれは開封府、つまり首都の事務次官でありましたから、弟と違って都には留まりました。私は司法関係を担当し、都というところは何かと事件が多く、それは非常に多忙な職務で、一見して実務が不得手そうな私などは右往左往して、改革についてもはやごちやごちや意見を言う暇などなくなるだろうということであったと思います。ところが、鳳翔で陳

知事が厳しく鍛えて下さったお蔭で、実務をこなすのもそれほど苦にはならず、職責をきちんと果たしつつ、12月には「勝負手」しょうぶてを放ったのでした。

——勝負手？ えーと、勝負手っていうのは、もしかして将棋の世界の言葉じゃなかった？ 中学生の藤井聡太ふじいそうたくんの活躍で、このごろは将棋しょうぎのことがよく話題になるけど、うちの叔父さんは、いまはやりの「観る将」みるしょうぎを前から実践していて、将棋のことをときどき話してくれたりするんで、ボクも勝負手っていうのを聞いてたけど、もしかしてトーパー君の時代からある言葉だったりした？

㊦ いえ、私も将棋から知りました。どちらかというところと形勢が不利に陥った側が、

勝敗を大きく左右しそうな手を思い切って放つのが勝負手です。私も朝廷から締

め出され、形勢挽回の大勝負に出たのです。

このときにも陳知事に鍛えていただいたのが活きました。私は父の影響で、事の本質を見抜き、それを的確な言葉で簡潔に指摘することが何よりも肝要であるとの考えを抱いていました。表面に見えている個々の事柄をあれこれ取り上げ、議論だけにぎやかにしてもほとんど意味がありません。しかし、本質が掴めたからと言って、それで問題が解決するわけではありません。とりわけ政治においてはそうだということが、鳳翔に赴任した最初の頃にはわかっていませんでした。陳知事は私の思い上がりを打ち砕き、小さな実践を積み上げて行くことの重要性を教えてくださいました。

勝負手の第一段階は小さな実践でした。改革とは直接的には関係しないある提言を皇帝にしたのです。このとき、新年に宮中で行う行事のために、特別詔えの

灯笼を買い上げるということが進められていました。私は仕事柄、買い上げ担当の宮中の役人が民間の商人を不当に苦しめている事実を掴みました。それで、灯笼の買い上げを止めて、宮廷が率先して節約の範を示すべきであると皇帝に申し上げたのです。

——えーと、なんかよくわかんないんだけど。役人が悪いことをしているのなら、それを取り締めればいいんじゃないの？ 買い上げを中止すれば、それはそれで悪いことはとりあえずできなくなるだろうけど、悪い役人はそのまま許されちゃうよね。それでいいのかなあ。

① 私としては、皇帝に向かってものを言う構図を作りたかったのです。事は皇

帝の個人的な嗜好に関わり、逆鱗に触れる恐れもありました。もし皇帝が聞き入れて下されば、先に「何か言いたいことがあればいつでも言うがいい」と言ってお下されたのは真実の言葉であつたと証明されます。そうなつたら、そのときにこそ真の勝負手を放とうと考えたのです。

——そういうことか。それで、どうなつたの？

Ⓣ 皇帝はすぐに灯籠の買い上げを中止して下さいました。私は数日間家に籠り、長文の意見書を書きました。何度も何度も書き直し、まさしく不眠不休で書き上げた朝、それを持って皇城に上る前に、息子と妻と馬正卿を呼び集めました。このとき「手本は范仲淹」が頭をよぎりました。范仲淹はあることを皇帝に直言し

ようとしたとき、「今日を限りに父は家に帰らぬ思え」と、息子に後を託しました。

私は、妻と子と馬正卿に、我が母から范滂はんぼうについて教わったときのことを話し

ました。そのエピソードは覚えておられますか (📖 第2回)。

——また記憶力のテスト？ えーと、ちよつと待つて、すぐには思い出せないんだけど……。

① 范滂は後漢の人で、当時の政権のあり方を鋭く批判して都を追われ、帰郷しました。すぐに都から范滂を反逆罪で捕える役人が来しました。逮捕されれば死刑にさせられてしまうことがわかっていたので、県の長官は「一緒に逃げましょう」と范滂に言いました。

——あつ、思い出した。それで、范滂は逃げなかつたんだよね。「悪法も法なり」といったソクラテスと同じだったんだ。范滂は母親に別れを告げ、自ら逮捕されに行つたという話をトバー少年はお母さんから聞いて、「僕が范滂と同じことをしたら、母上は許してくださいますか」といったんだよね。

㊦ その通りです。母は、

「おまえが范滂になれて、この母が范滂の母になれないことがありましようか」と言つたのですが、息子と妻と馬正卿に向かつて私は、

「私が范滂になれて、おまえが范滂の息子になれないことはない、そなたが范滂の妻になれないことはない、そのように言いはしない。ただ、君が范滂の県の長

官のように一緒に逃げようと言わないことはわかっている。私の身に何かあったなら君に全てを託す。おまえとそなたは、そういうことでどうか安心してほしい」

馬正卿は、

「あの日、若旦那の馬の前に飛び出したのは、この日のためであったということになりましょうか」

——そこまで覚悟した勝負手だったんだ。

Ⓣ このときの意見書はかなり長く、それについて話し始めたら今夜のこの後の時間を全部使っても終わらないかも知れません。「游たびの奇絶」の主題からはずれません。かなりためらうところですが、続けて申し上げてよろしいでしょうか。

——トバー君の好きなようにしてくれてかまわないよ。不眠不休で書いたんだよね。聞くほうのボクも、なんなら徹夜になったっていいよ。夜勤には慣れてい
るし、明日は休みだし……。いつもみたいにむしゃむしゃ食べ、がぶがぶ飲みな
がらじゃなくて、ここは気を引き締めて聞かせてもらおうかな。

㊦ 弟は新法を審議する部署で法案を精査し、原点に立ち返って議論することの
必要性を訴えました。頭脳の緻密さで弟よりも数等劣る私は、法案を仔細に検討
するのではなく、改革をどのようにして進めようとしているのかという実態を観
察し、そこに大きな問題が潜んでいることを見出しました。たとえ新法が正しい
国家像を設計しているとしても、このようなやり方では弊害が数多噴出して、国

も民衆も大変ことになってしまいうに違いない、何とんでも改革に待ったをかけなければならぬと考えての意見書です。

では、お聞き下さい。

でんちゆうじょう 殿中丞、ちよくしかん 直史館、かんかんこういん 監官誥院、ごんかいほうふすいかん 權開封府推官である臣蘇軾は、わたくし 謹んで万死の覚悟をもって再び皇帝陛下に文書を提出いたします。

最初に並べたのが私の肩書です。前半が朝廷における私の身分、後半が臨時に都の仕事をしていることを示しています。

わたくし 近頃臣は我が身の愚かさ賤しさを顧みることなく、封書を提出し、宮中で灯籠

をお買い上げになる件について申し上げました。お上の權威を犯し、罪は赦され
ないものと、むしろ蓆を敷いてその上に畏まって座り、「刑罰が加えよ」との御命令が
聞こえて来るのを耳を澄ませて待っておりまして。十日を超えてもそれはなく、
その筋の人に尋ねましたところ、灯籠のお買い上げはすでに中止になったとのこ
とでありました。

わたくし臣は、陛下がぶしつけな意見の提出を赦して下さったばかりでなく、それをお
聞き入れ下さったと知って、驚喜し、望みを過ぎた結果に感じ入って泣いたので
あります。さよう堯や舜や禹や湯の古代の聖君主はいずれも、過ちを改めることに躊
躇せず、善に従うこと川の流れに乗るばかりであるう懸念に勉めました。ところ
が、それは秦朝、漢朝以降は絶えてしまい、よくやく今ここに聞くことができた
のであります。

灯笼の購入はごく些細な過ちで、陛下御自身をお煩わせするまでもないようなことでありましたが、陛下は瞬時に改められました。このことは、そのお知恵が天下に抜きん出ていながら、最も愚かな者からも意見を聞かれ、その御權威は四海に及んでいながら、最もつまらない人間にも腰低く応じられるということを意味しましょう。よって臣は、陛下が民を富ませ、わたくし 刑罰の必要がないように国を治め、兵を強くして諸外国を圧すること、堯、舜、湯、武ぶに等しいと知ったのであります。

陛下がこのようでありますからは、誰が陛下に背きましようか。お仕えする者は心の内の全てを陛下にお見せして、身の一切を擲って力を尽くすことだけを考え、その他一切は顧みはしないのです。

——ちよつと待つて、いまの部分は皇帝をほめすぎだつたりしない？ 昔のことだから、皇帝をうーんと持ち上げて、自分をうーんと下げて書かないといけなかつたつてことかな。

㊦ 当時の皇帝はいまでは想像もできないくらいに権威があり、私の意見を皇帝が聞き入れて下さつたという感激は、ここに記した通り非常に大きなものがありました。

いま天下には灯笼のお買い上げよりも大きな事柄があります。それを差し置いて灯笼について先に申し上げましたのは、信頼を寄せるよりも前に諫められるのは聖人でも受け入れられなかったことであり、交わりが浅いうちから核心に迫つた

ことを言うのは君子の戒めるところであるからです。試みに小さなことを論じ、

その結果を待って大きなことを申し上げようと考えたのであります。いま陛下は

わたくし臣を赦され処罰なさいませんでした。それはすなわち、わたくし臣が大きなことを申し

上げるのをお許しになったことを意味すると申せましょう。許されながら言わな

いのでは臣下として罪になります。よってここに申し上げる次第です。

わたくし臣が申し上げたいのは三つです。人心を結ぶ、風俗を厚くする、紀綱を存する

であります。

——よくスピーチで、三つありますとかいって、二つしかいわなかったり、逆に五つも六つもいったりすることがあるけど、最初にすぱっと三つを列挙したんだ。改革の進め方に問題があるといっていたのが、この3点なんだね。

㊦ 問題点を抽象的にまとめるとこの3点に集約されます。最初に「人心を結ぶ」について論じます。

人の行動には必ず依拠するところのものがありません。臣下は陛下の御命令に依拠し、それによって人民を動かすことができます。陛下の御命令は法に依拠し、それによって横暴な者も服従させることができます。人の最も上に立つ人主じんしゅは何に依拠するのでしょうか。

しよきよ『書経』にこのような言葉があります。

「私は億兆の民の上に君臨している。それは、腐った縄で六頭の馬を操って走るほどに危ういものである」

これは、天下に人主よりも危ういものはないことを言い表しています。ひとたび集まれば君主と民の関係になりますが、ひとたび離ればたちまち仇敵となります。集散は紙一重であります。天下が一人のもとに帰するときにはその人を「王」と言い、人々の心がばらならなくなったときにはその人を「独夫」ひとりぼっちと言います。このことから、人主の依拠するのは人心だけであることがわかります。人主にとっての人心は、木にとっての根のようなもの、ともしび燈にとっての油のようなもの、魚にとつての水のようなもの、農夫にとっての田のようなもの、商人にとっての資本のようなものです。木に根がなければ枯れ、燈に油がなければ消え、魚に水がなければ死に、農夫に田がなければ餓え、商人に資本がなければ貧窮となります。人主は人心を失えば亡ぶのです。これは必然の理であって、逃れることのできない災いです。

この必然の理は大昔からあり、ずっと畏れられて来ました。禍を楽しみ、亡ぶのを好み、性根を簡単に失ってしまうような者でなければ、誰が敢えて我欲をほし
いままにして、軽々しく人心を犯そうとするでしょうか。

古代の大臣の子産しさんは「衆人を怒らせると手が付けられず、人主一人の欲を押し通すことなどできない」と言って、慎重に政治を行いました。孔子こうしも「民衆を動かすには、先に民衆の信頼を得なければならぬ。信頼がないのに動かそうとすれば、民衆の恨みを買うことになる」と言いました。

ところが、秦国の大臣であった商鞅しょうおうは、人々の批判を耳に入れず、法を変え、俄かに国を富まし国を強くしました。しかし、商鞅は天下の恨みを招き、民衆は利益だけを知って正義を知らないようになり、刑罰を恐れて道徳を忘れました。そのため秦国は天下統一を成し遂げはしたものの、一瞬にして滅んでしまいました。

商鞅自身も罪を問われて逃亡し、誰にも受け入れてもらえず、ついには車裂きにされ、一人も憐れむ者がいませんでした。

君臣が秦のようであることを願う者がどこにいるでしょうか。

——えーと、ここはもしかして、その商鞅とかいう人のしたことが、王安石がしようとしていることと同じようだといいたいのかな？ 王安石は車裂きにされて、宋が亡んじゃうってことになるの？

㊦ 商鞅がしたことと、当時始まり出した王安石の改革とがそのままそっくり同じであるとするのはさすがに言い過ぎですが、最悪の場合には同じような結末になつてしまう恐れがあると私は考えていました。

商鞅は、国家を統治するにはまず民衆に法を厳格に守らせる必要があると主張した法家思想ほうかの代表者で、徳による統治を説く儒家の思想とは大きく異なります。儒家は伝統的に商鞅を極めて否定的に批判し、私の意見書でも、商鞅を悪しき例として取り上げました。ただし、先に、皇帝の命令が法に依拠すると書いているように、国家は法によって治めるべきものであるとする法家の思想は基本的に国家の運営に取り込まれていました。

少し脇道にそれますが、商鞅の評価は不当に低いのではないかと疑義を唱える詩が王安石にありますので、それを紹介しておきましょう。

国が民を動かすには、

信と誠がなければならぬのは古いにしよから変わらない。

国家は一つの言葉こそを重いとし、

大金などは軽いとするのである。

今の世の人は商鞅を非難すべきでない。

商鞅は政治をして必ず実行したのだから。

これは王安石の若い頃の作品です。国政の改革が何度も提唱されながら実行を伴わないことに対して、このような詩を詠んだのでしよう。国家が何よりも大切にすべきは、言葉として出したら必ず実行することだと王安石は言っているのです。

——有言実行というのは大事なんだろうけど、民衆にとっては困るようなことで

あるのに、必ずやり通すというも、実は大迷惑だつてこともあるよね。国に対する不信感が強いボクなんかは、国がへんなことをしてくれるよりは、口先だけのほうがマシなんじゃないかって思ったりするけどね。

㊦ 意見書に戻ると、商鞅に続けていくつかの事例を並べて行くのですが、そこはたぶんわかりにくいでしょうから、適当に聞き流して下さい。

宋の襄公じょうこうは仁義に基づく行動を貫こうとしましたが、衆人の心を失って亡びました。逆に田常でんじょうは不義を行いながらも、衆人の心を得ていたのでその国は強力でした。

このことから、君子は行うことの道徳的な是非を論じるより前に、まず衆人の心

がまとまっているか、ばらばらであるのかを見ます。

謝安しゃあんが軍閥の長を用いたのは義として正しいとは言えませんが、衆人がそれを望んだからそうしたまでで、国はそれによって安泰でありました。庾亮ゆりやうが蘇峻しゅんを懲らしめるために都に召し寄せたのは正義の行使として悪いことではありませんでしたが、当時の情勢としてはまずいことであつたために国の危機を招いてしまいました。

このように見て来ると、古来、衆人と和やかに一致していて安泰でなかつた者はなく、強引に己の思うところを通して危うくなかつた者はいないので。

——いま挙げた例が、ふむふむと思えるような人にとっては議論に説得力が増して、しかも、トバー君はよくものを知っていると、感心したりもするんだろう

ね。

㊦ ここまでが、「人心を結ぶ」議論の前置きで、以下が本論です。

いま陛下も人心が悦ばずにいることは御存じでありましょう。宮廷の中の人も外
の人も、賢人も不肖の者も、皆が困惑しています。宋の開国以来、財政政策は三
司使副判官の職責とされ、百年を経過して問題はありませんでした。ところが
いま制置三司条例司という部署を新たに作り、六、七人の若い官僚を集めて日夜政
策を研究させ、四十余人の官僚を国内各地に派遣して、その政策を実行させよう
としています。その政策は広大な範囲に及ぶために、民衆はどうなることかとび
くびくしています。新奇な法が作られ、役人は皆動揺しています。賢者は政策の

狙いを掴もうとして理解できないために憂慮し、小人は朝廷の向かおうとしていしょうじんるところを推し測って、賢者を諂って陥れようとしています。

都から遠く地方に至るまで、様々なことが言われています。例えば、陛下は万民の主でありながら、利についてはかり目を向けています。例えば、執政は天子の第一の臣でありながら財産管理にばかり目を向けています。例えば、商人の仕事は破壊されて物価は騰貴すると。例えば、都の店舗には政府の管理人が置かれ、深山の村にも酒の製造を禁止する命令が下され、宗教寺院の収入は取り上げられ、兵士や官吏の給料が削減されると。数え切れないほどたくさん言われています。特に甚だしいのは、残酷な肉体刑を復活させようとしていると言者まです。このようなことが言われ出して、民衆は不安に駆られ、狼狽しています。

陛下も二三の大臣からこのようなことをお聞きでありましょう。しかし、陛下にそれを顧みられる御様子がないのは、

「朝廷には言われるような事実はないし、そのようなことをする意志もない。根拠のない民衆の言論、『人言』じんげんをいちいち憂うことはしない方がいい」という御判断からなのでしょいか。

人言はどれもが正しいわけではありません。しかし、疑わしいことがあるから批判も生じるのです。富をやたらと貪る人がいると、盗みをするのではないかと疑い、女性をやたらと好む人がいると、淫乱なことをするのではないかと疑うものです。

朝廷の何が疑わしいのかといえば、制置三司条例司を設置したことです。去年までの朝廷の人々は忠厚であったのに、今年の朝廷の人々は軽佻浮薄であるために、

にわかにな言が騒がしくなったということではないのです。

孔子はこう言いました。

「職人が仕事をしようとするときにはまずそのための道具を整える」「あるいは、役目に、それにふさわしい名称を与える」。

いま陛下は道具を整え、名称を付けておられながら、問題になるような事実はないし、それを行う意志もないと、弁の立つ者に言い訳をさせても、あるいは千金をばらまいて人々を納得させようとなさっても、人々はきっと信じませんし、批判もやまないでしょう。なぜなら、制置三司条例司を設置したのは、利を求めることに名を付けたに他なりませんし、六、七人の若者、四十余人の使者は利を求めるための道具に他ならないからです。

鷹や犬をけしかけて林に入れていながら、「私は獵をするのではない」と言って、

林の獣達は信じるでしょうか。鷹や犬を余所にやりさえすれば、林の獣はなついて来るでしょう。網を川や湖に投げ入れながら、「私は漁をするのではない」と言って誰が信じるでしょうか。網をうっちゃってしまえばいいのです。

わたくし

ですから、臣は、批判の声を消して和合せ、人の心を元に戻して国の根本を安んずるには、制置三司条例司をなくすのが最もよろしいと考えるのであります。陛下が制置三司条例司を設置されたのは、国家の利を増やし、国家の害を除くためでありました。これをなくしたら利が増えず、害が除かれないのなら、なくさなくてもよろしいでしょう、しかし、なくせば天下の人々が喜び、人心が安まり、利を増やし、害を除くことも行いやすくなるのです。それでいながらどうしてなくさずにいいのでありましょうか。

陛下は積り積もった弊害を除き去るために新たな法を立てようとなさっています。

法を立てるには、必ず宰相が熟議してから発案し、そして中書省において法案を審議することになっています。その過程を踏まない法は、安定した治世下では存在するものではなく、乱世の法と言わざるを得ません。聖君、賢相は決してそのようなことはしないのです。宰相が熟議し、中書省で立法するという正しい手順を踏むのなら、制置三司条例司は余分な存在であり、実質的に存在する名目がありません。

真に智恵のある者は、際立った特異なことはしないと言います。漢の文帝、景帝の時代の記録には特筆されるような事績は何もなく、唐朝の宰相であった房玄齡ぼうげんれい、杜如晦とじょかいの伝記には特筆されるような功績は何も記載されていません。しかし、天下が最もよく治まったのは漢の文帝、景帝の時代だとされ、最高の賢相は房玄齡、杜如晦だとされています。優れた事績は自然に完遂されて目に付くことがなく、

優れた功績は自然と成就して人に知れないものであるからなのでしょう。

上手に軍事力を行使する者には、際立った戦功がないとも言います。その言葉は用兵に限らず、あらゆることに通じます。

現在、意図されていることはまだ万分の一も実行されていません。それでも天下に際立った痕跡がすでにできあがってしまっています。それはあたかも泥の中で猛獣が戦ったかのように顕著であります。拙劣な謀はかりごとと言うべきではないでしょうか。

陛下が本当に国を富ませようとなさるのなら、正規の職務にある者を選んで、数人の大臣とともに熱心に議論させ、十分な歳月を使って実行して行くべきではないでしょうか。そうすれば、積もり積もった弊害も、天下の人々が気付かないうちに自然と消え去って行くであります。その際に恐れるべきは、志を立てる

ことが堅固でなく、道の半ばで終わってしまうことです。

孟子はこう言いました。「その進み方が速過ぎる者は、後退するのも速過ぎる」。

始めから終わりまで完遂するときにはじわじわ進むのであって、ゆっくりであっても十年の歳月をかければ成就しないことはないのです。

孔子もこのように言っています。「いきなり速く行こうとすると到達できない。小さな利に目移りすると大きなことは成就しない」。

孔子は聖人の仲間には入らないとするのなら、この言葉は用いるに値しないでしよう。

『書経』にはこう書かれています。

「広く官僚と謀り、庶民も一緒になって、皆が喜んで行動を共にするのなら大吉と言える。もしも逆らう者が多く、一緒に従う者が少ないときは、静かにしてい

るのが吉で、それでも為そうとするのは凶である」。

いま宰相、大臣も続々と辞任し、事を為そうとするところから離れています。朝廷の外での議論の向かうところは明らかであります。宰相は事を為す中に加わることで己の身が汚れるのを望んでいません。そうであるのに、陛下はどうして安んじておられるのでしょうか。愚かな臣わたくしには理解が及びません。

いまの部分では朝廷から非改革派の人々が続々と去って行く状況について述べています。自らの意志で去る者もいれば、改革派によって追い出された者もいました。ごく少数の改革派が強引に政権を運営するという異常な事態になっていたのです。

——皇帝に向かって、かなり皮肉を言い放っているみたいですね。最初は皇帝のことをものすごく持ち上げていたのに、ここでは理解不能の大馬鹿みたいにしきおろして、そこまでしてだいじょうぶなのかなあって、心配になっちゃうけど。だから、相当な覚悟を決めて提出したってことなんだね。

㊦ この後に歴史上の悪しき事例を具体的に列挙して行くのですが、聞き流していただくにしても、時間がかかるので、ばっさり省きましょう。そして……

わたし
臣が恐れますのは、いまここに昔の悪しき例を引いて論じているように、後世の論者が今を悪しき例に加えて論じるようになることです。

さらに言えば、今が昔の事例よりも具合のよろしくないことさえあります。中央

から地方に派遣して改革を遂行させようとしている官僚集団には、十分な実績のある者は一人もいません。事は非常に煩雑であるのに人員が少なく、能力がないにもかかわらず権限だけは重くなっています。能力がないのに権限だけが重い人がいると、人々は心の内で馬鹿にし、表面上だけ服従します。それは争いのもととなるでしょう。事が煩雑で人手が不足すれば、実効性が危ぶまれ、出来なくとも出来たかのような虚偽の報告が為されるであります。陛下が厳格に命じられて、虚偽の功績は断じて許さないとおっしゃっても、臣下の者は陛下の情を付度して、命令を守るよりもむしろ陛下の意向に副おうとするでしょう。朝廷の意向はいまどこにあるのでしょうか。改革の実行を好み、何もしないのを憎みます。一致して動くことを好み、異論を唱えてじっとしているのを憎みます。そうであるとはっきりとわかっていて敢えて従わないのは難しいのです。

臣わたしが恐れますのは、陛下せきしの赤子が今後、穏やかな歳月を送れなくなることです。これから行うとしていることは、実行が非常に困難であるのは誰もがすでに論じている通りです。

ここからは改革の中身について論じます。各論はあなたにとっては非常にわかりにくくなるので、それも省略します。

——いま聞いたところでは、「忬度」というので、いわゆる「モリカケ問題」をちよつと連想したただけ。「モリカケ問題」の解明には、誰が何をしたのかという具体的な事実の掘り下げが重要なんだろうけど、ボクなんかは、いまトバー君がいったように、命令を守るよりもむしろ上の者に従おうとするという構図があ

るということが明らかにされたなら、それでもう十分って感じなんだけど。法律を最も遵守しなければならぬ立場にある官僚が、法の抜け道を懸命に探して、上の者の意向に合致するようにしてしまっつてというのが笑っちゃうよね。そういうところを改めるにはどうしたらいいのかを考えるべきなんだけど、事実の掘り下げの手前でごちゃごちゃやってるのって不毛だよなあ。

㊦ 政策の中身を吟味した上で、いま行おうとしているのは、後世の厳しい批判に耐えられないということをもう一度論じます。

孟子は言いました。「死者とともに埋める土偶を初めて作った者の子孫は、必ず絶えるであらう」。

土偶を作って死者と一緒に埋葬することを始めれば、いずれ土偶に留まらなくなり、君主は土偶よりも臣下自身が死後の伴をするのを望むようになり、臣下もまた忠誠を示すために殉死を望むようになります。

いま陛下は新たな法を不正がないよう運用せよと厳しく命じておられます。しかし、数世の後の暴君、あるいは汚れを厭わない役人が、いま作られた法をもとにあくどいことを企てるのを陛下はどのようにしてお止めになるのでしょうか。土偶から殉死が発展して数多の悲劇が生まれたように、後世の人々は非常な苦しみに遭うであります。そのときに、元凶は宋の時代の改革にあったと論じられたなら、実に残念ではありませんか。

——歴史好きのトバー君としては、後世の批判が気になるんだね。ボクなんか

歴史にはたいして関心をもたないほうだけど、原子力発電については後世の批判がとても気になるね。だって、放射性廃棄物は何万年にもわたって環境に害をなすんだよ。いま自分たちがちよつとばっかしエネルギーを余分に使いたいだけのために、やっかいなものを後世に残して、それで批判されないなんてことはありえないよ。ボクは反対だぞって叫んだって、後世の人からしたら、結局同じ穴のむじななんだよなあ。

だから、後世の批判を考慮すべきだという部分は賛同するけれど、ちよつと前に、静かにしているのか吉だって、いったと思うけど、違った？ そこがちよつとひっつかかるなあ。それって、単純に問題の先送りってことになったりしない？ 後世の評価を恐れるとかいって、じつとしているだけだったら、本当はよくないんじゃないの？

㊦ 何度も言うように、「手本は范仲淹」以来、改革をしなければならぬというのが大前提としてあります。私は、じっとしているのがいいと言っているのではなく、王安石のやり方は間違っているのです、急がずに、時間をかけて別の改革にじっくり取り組むべきだと主張したのです。

——それじゃあ、聞くけど、トバー君には代替案があったの？

㊦ 鋭い御指摘です。実を言えば、非改革派に「冗吏、冗兵、冗費」を省けという范仲淹以来の大まかなスローガンはあっても、具体的な実行計画はありませんでした。

後になって、王安石を中心として改革を進めた人達とその後継者を「新法党」ないし「変法党」、改革に反対した人達とその後継者を「旧法党」と呼ぶようになりました。王安石の改革は多数の法を作ってそれに基づいて行つたのが特徴で、改革派を「新法党」と呼ぶのは妥当性があると思いますが、非改革派を「旧法党」という呼称でひとくくりにするのには、私は少なからず違和感を覚えます。「旧法党」と言うと、皆が一律に旧い法を墨守しようとしたような印象を与えかねないからです。何度も言うように、私にしても弟にしても、あるいは往時のスーパースターにしても、もともと改革を志し、かつ改革はきちんとした法に基づいて行ふべきだと考えていて、旧い法をそのまま守ることがよいとしていたわけではないのです。

しかし、非改革派の中には、何も変えたくない人達も実際には混じっています

た。非改革派の誰かが何かの具体案を作って、王安石に反対する人達が一致してその案でまとまるとういうような状況にはなっていないませんでした。王安石と皇帝は、新法に反対するのはすなわち改革そのものへの反対であるとして、相当に強硬な姿勢で非改革派と対峙したのでした。

私の意見書に戻りますと、ある二つの新法には相互に矛盾するところがあり、それらを同時に実施したのでは、互いに効果を打ち消して合つて害を生じてしまふと指摘します。その部分は弟から聞いたことに基づいています。そこは省いて、その次にこのように書きます。

わたし
臣が推量しますに、このような弊害が本当にあるのか検討しようとして陛下が思われたならば、果たして実態はどうかと法の立案者にお尋ねになるであります

よう。尋ねられた者は、陛下が改革を断行なさろうとしているのを知っていますから、必ずこのように言うでしょう。「この法には利はありますが害はありません」。

そして実際に新法を施行して後に、その成果があったと報告するでありましょう。

わたし

臣の愚見を申し上げれば、このようなことは信頼に値しないのです。臣は先頃

わたし

西方の地におりました。そこでは、国境方面での事態に対処するために兵士の徴

収が実施されていて、民衆が嘆き恨み泣く声を臣はたくさん聞きました。とこ

わたし

ろが、朝廷から派遣された役人は、民衆は皆喜んで朝廷の命令に従っているとの報告だけをしていました。朝廷の意向に合うようなことのみを見たいと願う役人にはそのことしか見えず、朝廷がどのような報告を歓迎するかを知っている役人はそのような報告をすることしかしません。昔も今もそのようなことはたくさんあります。そうした虚偽によって国を滅ぼすには至っていないいまのうちに、陛

下が正しく詳細に吟味されることを臣は望むばかりです。わたくし

次にまた若干の具体的な事柄を述べた上で、「人心を結ぶ」議論の結論に至ります。

陛下は天機も明瞭にお分かりになり、聖なる智略は神に及ぶほどでありますから、

わたくし

臣が申し上げるようなことはたちどころに御理解いただけるであります。うが、

それでもこのようにおっしゃるかも知れません。

「すでに改革を始めたのだ。途中で変えるのはよろしくない。天下の人々は朝廷の方針が一貫しない、人を用いても最後まで成し遂げさせないと批判するであろう」

始めたからにはそのまま歳月をやり過ぎ、万一の成功を願うということもあ

り得ましよう。しかし、臣わたしは密かに思うものであります。それは間違いであると。

古いにしえの英主として漢の高祖に勝る者はいません。酈食其れきいきなる者がある謀はかりごとを高祖に進言し、高祖は即座に「よし」と言って、酈食其にそれを実行するよう命じました。しかし、その直後ちようりように張良の意見を聞くと、口中の食へ物を吐き出し、「やめさせろ」と、酈食其を激しく罵りました。高祖が「よし」と言ってから「やめさせろ」と言うまでわずかの間しかなく、まるで子供の気まぐれのようにありました。このことから高祖がなっていないと考える人はおらず、真に英邁な君主は我がを押し通すことをしないと知るのです。

陛下が一度は「よし」とお考えになってそれを行い、しかし「よくない」とお分わかりになった時点でお止めになれば、人々は陛下こそは至聖至明の英主であると

考えるでありますよう。

いま改革を議論している人々は必ずこう言うでしょう。

「陛下は将来、民とともに改革の成就を樂しむことができます。民は陛下のように初めから先を予測することはできないので、あれやこれやと言ひ募ります。陛下はそれに惑わされてはなりません。心に期して必ず実行あるのみです」

これは乱世において危険な一発勝負にかけて方に一つの成功を願う者の言説であります。陛下がもしもこれを信じて用いられるならば、声高な議論に従って人間の最良の知恵に逆らい、空虚な計画に頼って實際の禍を迎えるようになり、成就を樂しむどころでなくなってしまうでしょうし、実はすでに民衆の怨みは湧き立って来ているのであります。臣が人心を結ぶわたくしことを願うと申し上げているのは以上のようなことでもあります。

——つまり、世論に耳を傾けよ、ということかな。国会のまわりに人々が集まって懸命に声を上げているのに、一切耳を貸さずに突っ走ろうとしているという感じだったのかな。

莫大なお金を投入してミサイル迎撃システムを作ろうなんていうのは、トーバ―君がいまいつていた「空虚な計画に頼って実際の禍を迎える」というのどちようど当てはまりそうだね。言い換えると、アホな言い草にだまくらかされてがむしやらに走るの愚の骨頂ってことだよ。皇帝に向かってそんなふうにあからさまにはいえないだろうけど。

Ⓣ

いえいえ、実際の表現はもっと激しかったと言うべきでしょう。原文はこう

です。

則是徇高論而逆至情（則ち是は高論に徇したがいて至情に逆これらい）、
持空名而邀実禍（空名くうめいを持して実禍むかを邀ええる）

「高論」、一見もつともらしい見かけ倒しの議論と、「至情」、最高の理非判断とを
対比させ、「空名」、実体のない虚しい名目だけのものと、「実禍」、まさしく実態
のある禍とを対比させています。

——かなりきつい言い方をしたんだね。死を覚悟して書いたつていうのもおおげ
さではなかったんだ。でも、「危険な一発勝負にかけて方に一つの成功を願う」と

いうのは、「勝負手」の定義になっているみたいでおもしろいかも。

㊦ 次が二番目の「風俗を厚くする」という議論ですが、「風俗を厚くする」という言葉の意味をまず申し上げておきましょう。日本語でいま「フーズク」というと元来の意味から遠く離れた使い方になっていて、よもやそちらの方と曲解されることないでしょうけど。

「風俗を厚くする」とは、「社会全般のモラルを高める」という意味だと理解していただいてよろしいかと思えます。法によって上から民衆を規制する社会よりも、民衆自らの規範意識によって作り出されて行く社会の方をよりよいとする考えに基づいています。

そもそも国家の存亡の根本原因は道德の浅深にあって、国家の強弱にあるのではなく、国家が存続した年月の長短は、風俗の厚薄によるのであって、国家の貧富によるものではありません。道德が誠に深く、風俗が誠に厚ければ、貧にして弱くとも長く存続し、道德が誠に浅く、風俗が誠に薄ければ、強かつ富むとも短くして亡んでしまうのです。国家の君主はこのことから何を重んじるかを知らなければなりません。

古の賢君は、弱いからといって道德を忘れることなく、貧しいからといって風俗を傷つけるようなことはしませんでした。智者が他国を観察するときには、何よりもこの点から評価をしたものです。

これを議論の前提として、浅深、強弱、長短、厚薄、貧富の実例を挙げて行く

のですが、それは省きます。

以上のことから、陛下が道徳を尊んで風俗を厚くなさることを臣は願ねがい、陛下が富みかつ強くなることの功いさひを急がれることを願わないのであります。陛下がかつての秦朝や隋朝のように領土を拡大されたならば功があつたと言いうべきなのでしょう。しかし、国家の長短はそこにはないのです。

そもそも国家の長短は人の寿命のようなものです。人の寿命のものは「元氣」にあります。それと同じように国家の長短のものは「風俗」にあります。世間には病気がちでも長生きの人もいれば、血氣盛んでも若くして突然死んでしまう人もいます。「元氣」が存在すれば病気があつても生きるに害はなく、「元氣」が消耗してしまえば若くても生きるのは危あやうくなります。

ここで少し解説を加えます。以前に、天地の間に満ちる「気」の話をしたと思います。実体はよくわからないものの、「気」が物の存在と変転のもとになっていると、昔の中国では考えていました。人間に宿る「気」の根本をここでは「元気」と表現しています。

もう一点、暗黙の大前提として、宇宙の根本原理が、国家のあり方、人間の生き方にも一貫しているという古い中国の思考法があること申し上げておきます。それがあから、人間の寿命と国家の存亡を比較するここでの議論に十分な説得力があると考えたのです。

——議論の前提となるものを共有していないと、なんだかへんなたとえ話をして

いるとしか思えなかったりするもんね。

そういえば、どつかのへんな国のへんな政治家が、「わが国の伝統に反する」とかいって、なんかの公的な行事にLGBTの人が出席するのに異を唱えたつてことがあったよね。「わが国の伝統に反する」のがどうしていけないことなのか、ボクにはまったく理解できないんだよなあ。「伝統に反する」のなら、むしろ推奨に値するんじゃないかって思ったりするんだけど。しかも、笑っちゃうのは、「伝統に反する」といったのは認識不足の誤りだったんだよね。ついでにいうと、夫婦同姓だって「わが国の伝統」だっていうのはまるつきりウソだしね。「わが国の伝統」を声高にいう人は、100パー「わが国の伝統」に無知で、さっきの「高論」「空名」と唱えているだけと断言していいと思ってんだ。

Ⓣ ということ、現代では前提を共有しないために説得力を持たない議論を続けますと、

よく養生する者は、日常動作を慎み、飲食をほどぼどにし、関節や筋肉をよく揉みほぐし、使い古した「氣」を吐いて新しい「氣」を身の内に納め、やむを得ず薬を用いるときには品質のよい物、性能のよい物、長く服用しても害のない物を選びます。それによって五臓が和平であるから寿命が長いのです。養生がよろしからぬ者は、慎んだりほどほどにしたり、氣を吐いたり納めたりに無頓着で、上質の薬でなく質の悪い薬を用いて、無理やり「氣」を強めようとして、かえって根本を危うくして、たちまち倒れてしまうのです。天下の勢いもこれと異なることはありません。わたくし臣は陛下が風俗を愛惜されてそれを護ること、養生に熱心な

人が「元気」を護るようであってほしいと願うものであります。

古の聖人は、厳格な法が社会をひとまとめにし、勇敢な者が事を成し遂げる可能性があると知らなかったわけではありません。一見すると、真心などというものは役立ちそうになく、老成の者はただのろまのように見えます。しかし、聖人は法をもって真心に、勇敢をもって老成に代えようとはしませんでした。そうしても得るところが小さく、失うところが大きいからです。

ここで失うところが大きかった実例を列挙して議論を補強するのですが、唐の時代の盧杞ろきを取り挙げたところから聞いていただきましょう。我が父が遺稿において、世を乱した悪しき人物の例として、特に王衍と盧杞の2人を取り挙げていたのを覚えておられましょうか。

——えーと、場合によっては、皇帝を説得するためなら、王衍や盧杞に似ていると思われても構わないと、そんなふうな決意をして故郷を発つたんだよね。2人がどれくらい悪いヤツかってことは、たぶん聞いたのかもしれないけど、あんまし覚えていないなあ。

㊦ 盧杞という人は、なぜか時の皇帝の心を完全に掴み取り、自分にとって都合がよく、国にとってはあり得ないことを皇帝に選択させました。安祿山あんろくざんの反乱に断固として抵抗した顔真卿がんしんけいという人がいたことを前にお話していますが、**第9**
回、忠臣の手本のような顔真卿が朝廷にいたのでは思うように振る舞えないと、死に追いやったのが盧杞でありました。

盧杞が唐朝の大臣になると、法制を整えて天下を引き締めることを皇帝に採用させました。それからは世の人の心が次第に軽薄に流れ、ついには都から皇帝が逃げ出さなければならぬ事態に至ったのでした。

我が宋朝の仁宗皇帝が天下を治めたときには、法の運用はいたって寛大で、人を用いることでは順序がありました。過失がないよう努め、旧来の仕組みを軽々しく変えることはありませんでした。その時代の功いさしおを検討すれば、さしたるものはなかったと言えましょう。兵を用いることでは、十回外に出て九回敗れました。

国庫をみれば、かろうじて収支が足りて、余剰はありませんでした。それでも、皇帝の徳は人々に及び、風俗は義を知り、皇帝が逝去された日には、天下の人々は自分の父母を失ったように悲しんだのでした。国家が長く保たれるとは何によ

るのか、仁宗皇帝はよく御存じであったのです。

現在の改革を議論している者は、こうしたことの根本を理解しないで、仁宗皇帝の治世の終わりには、官僚がいたずらに慣例に従うだけで、業績が上がらなかつたと批判し、そのことをもって、官僚を厳しく管理して引き締めなければならぬ、能力主義で評価すべきだと、新進の勇ましく鋭い者を中央に招集して、速やかに実効性の挙がるようなことをさせようとしています。そのため、改革の実利が出るよりも先に盧杞の時代のような軽薄な風潮が早くも生まれ出て来ています。歴史は同じことを繰り返すわけではなく、過ちをしない人はいません。国家の君主は包容力に富むのがよく、明察過ぎてはいけません。もしも陛下が多くの人々を包み込まれるのなら、優れた人材は順次用いられるようになるでしょう。監察を厳しくして、過ちを一切認めないようにするのなら、人々は不安になって、た

だ見逃されることばかりを求めようになります。それは恐らく朝廷にとってよいことではありません。陛下が願われることでもありませんでしょう。いまもし、弁が立ちすばしっこいだけの者を用いて応対が遅いだけの者を退け、大きなことを言って、言葉を飾ることに巧みで、いかにも徳があるように見せかけているだけの者を用いるのなら、古の聖人が大切にしたものは一切消え去ってしまうでありましょう。

古より、人を用いるときには必ず何度も試しました。際立って抜きん出た器量があっても、成し遂げた功績がなければ、高い地位に用いることはありませんでした。そうであるのは、一つには、いろいろな経験をさせて政治の難しさを知らせるためで、それによって軽々しい行動をしなくなります。また一つには、その功績が立派なものであれば、周囲から重んじられ、とやかく言われることがありま

せん。昔、蜀の劉備りゅうびは黄忠こうちゆうを抜擢して將軍の地位を授けようと思いました。しかし、諸葛孔明しょかつこうめいは、黄忠の名望はまだまだとても関羽かんうや張飛ちようひに及ばないので、もし同じ地位に就けたならば必ずや悦ばれないだろうと、賛成しませんでした。果たして、黄忠を將軍にすると関羽が不平を口にしたのでした。黄忠はまことに豪勇の士であり、劉備のもとに君臣は一つにまとまっていたのですが、それでもなお人の用い方にはよくよく考慮しなければならなかったのです。

この後にも幾つかの事例を並べてから、

高い地位、多くの報酬は人が強く望むものです。必ずたくさんの苦勞を重ねてからでないとはそれは得られず、得られたなら長くそれを保てることが明らかに示さ

れているのならば、人々はそれぞれ自分の今の状況に安んじて、俄かに獲得しようと思ったりはしません。いまもし簡単にすぐに進める門が開かれ、思いの他たつたひとまたぎで高い地位に就けるようになり、それを得た者が望外の幸いであると思わずに、当然のことだと胸をそらせて自慢したならば、その門に入れなかつた者は見捨てられたとの恨みを抱くでありましょう。天下には官職に就くのを待ち望む者が大勢います。その者達を、不用意にも、諸君等は役立たずだと恥じしめたならば、何が起こるのか予想が付きません。風俗を厚くすることなど全くできなくなってしまうのです。

科挙に合格して官員になってから朝廷で用いられるまでには、常に十年以上がかかることとされています。難しい仕事を与えられ、その成績を厳しく吟味され、一つでもよろしくない失敗があれば、生涯にわたって高い地位に上れなくなるこ

さえあります。ところが、たった一人の者が推薦しただけで、たちまち朝廷で用いられ、それでも足りないとはかりにさらに高みに地位に就けるようなことがいま行われています。それに対して、長年苦勞してようやく朝廷で用いられるに至った者はどのように感じるでありませんか。そもそも官職に就くのを待ち望む人の多さに比べて欠員が少ないために、長年にわたって人々の憂うところとなつています。それなのに、別の門を開いて、巧みに進む者を入れていいのです。巧みな者が甚だしく優遇されるのなら、拙い者はやるせなさに追いやられ、両者の利害対立が形として現れ出ると察しないわけにはいきません。従って、不器用でも純僕な者が減って、巧みですばしっこい者がますます多くなるに違いないのです。

——えーと、よくはわかんないけど、ここのところは、安定した年功序列みたいな人事をやめて、能力主義みたいな感じにして、やる気を表に出して見かけだけできそうなヤツを出世させたなら、全体としてメチャメチャになってしまっただろうって批判しているのかな。似たようなことが日本の会社でもあったりなかったりするらしいよね。

㊦ 王安石は改革の実行部隊として若手を大胆に起用しました。実績によらず、王安石が、改革に情熱を傾けて働くと判定した者が用いられたために、客観的に見て首をかしげざるを得ないような人間にも重要な任務が与えられるようになりました。そのため、ここで指摘したような弊害が実際に生じるようになり、後には王安石その人の足元を崩すようなことにもなりました。王安石は人を見る目に

おいて、残念ながらあまり鋭くなかったのです。

王安石は、改革にどれだけ貢献したのか、その成績を評価して昇進を決める方針を打ち出し、私はそれを批判しました。その部分は省略して、「風俗を厚くする」の議論の結語を申し上げます。

陛下はただ簡素であることを規範とされ、清浄な御心で衆人を御覧になり、奸臣かんしんの付け入る隙を与えず、民衆の道徳心を高めるようになさればよろしいのです。臣わたくしの願う風俗を厚くするとはこのようなことであります。

これは言い換えると、煩雑な人事評定システムを作って官僚を効率的に働かせようとするよりも、国民全体のモラルを高めた方が国としてしっかりしたものにな

る、ということですよ。

——うーん、抽象的な提言で……。具体的であるより抽象的であるほうがわかりやすいって、ボクはいつてきたけど、ここはちよつとぴんところないかも。皇帝は黙って見ていれればいいってことなのかなあ？

それと、ちよつとひつかかるのは、議論の本筋とはあんまし関係ないんだけど、科挙に合格してから中央に用いられるまで少なくとも10年はかかるっていったよね。でも、トバー君は違ったんじゃないの？ 鳳翔で3年間勤めただけで、もう中央にきたんだよね。

Ⓣ

その通りです。ただ私は制科の試験に合格していましたが、短い経験でも

人々を納得させるだけのものがあつたのです。

——試験かあ。試験至上主義ってことになると、国民全体のモラルを高めるとい
うのとなんか矛盾しない？

㊦ 孔子以来、学問の根本は人間性を磨くこと、人格の陶冶であると考えられて
いました。私が王安石による科挙や学校の改革に反対したのは、学問の最も肝要
なその部分を忘れて、もっぱら実用的な知識を授けて官僚を養成することを目指
そうとしたからです。科挙には試験至上主義の批判が当たる部分もありました。
しかし、人格の陶冶も含めて学問をどれほど深く学んだかを測る手段として、当
時としては科挙が最良のものであるということ、それまでの実績から証明され

ていました。科挙の合格者から何人もの名宰相が出たのがその端的な例です。もし科挙がなかったなら、その全員が一介の庶民として生涯を終えていたのです。王安石にしてもそうです。

中国の長い歴史の中で、人材登用の仕組みとして何がよいのか、試行錯誤の末に、試験が最も公平で、最も説得力があり、社会に流動性を持たせることに関しても最も有効であるというのが、宋の時代に到達した結論でした。しかし、科挙だけが唯一の開かれた門でありましたから、その運用には細心の注意が必要でした。科挙が公正である限りは、不合格となった者も、社会を恨まず、自分の能力が及ばなかったと納得できました。科挙の門を潜り抜けた先でも同様です。官僚の昇進プロセスに不公正なことがあってもあれば、国家への信頼は揺らぎかねないのです。

——そうはいっても、試験至上主義の裏には、合格できなくて失意のうちに死んでしまった董伝みたいな気の毒な人もいたんだよね。試験に失敗しても、社会のなかで自分を活かす道があったらよかったんだろうな。実務に長けた人をもっぱら採用する道があったっていいと思うし。

㊦ 意見書の最後が「紀綱を存する」という議論です。

古から、国を建てる時には、中央と地方の力の均衡に注意を払いました。周王朝は中央が軽く地方が重い例で、秦王朝は中央が重く地方が軽い例でした。中央が重いと悪い大臣が皇帝を意のままに操ろうとする弊害が生じ、地方が重いと有

力な諸侯が中央に取って代わろうとする弊害が生じます。聖人は国勢が盛んな間にも衰えることを予測し、規範を立てて弊害が生じないようにしました。我が宋朝は、国家の租税が中央に集められ、兵力の多くが都に置かれています。中央が重い例であると言えるでしょう。

恭しく拝察しますに、我が宋朝の祖宗が予め深く計るところのものは何であったのでしょうか。わたくし臣ごごとき者がよく理解するところではありませんが、台諫だいかんという部署に与えた役目を見れば、祖宗が国家の衰亡を防ごうとした絶妙の計画の一端を窺い知ることができます。

ここで議論する台諫とは何かというと、詳しいことは省きますが、朝廷内の極めて重要な部署で、一方では皇帝の過ちをただす役目を、一方では官僚の過ちを

告発する役目を担っていました。皇帝を頂点とする官僚機構が、皇帝も含めて誤った動作をしないよう監視するのが台諫の役目です。もしも、皇帝を諫める、つまりブレーキをかける機能が強ければ、台諫は皇帝よりも上に立ち、官僚優位の政治体制ということになります。逆に、官僚の過ちを告発するところを皇帝の意向に沿って過度に行えば、官僚はひたすら皇帝の意向を付度してびくびくしていなければならず、皇帝の独裁を強めることになります。台諫の運用には絶妙なバランスが求められ、宋朝の初期に幾度かの調整が施されました。それが「絶妙の計画の一端」ということです。

秦朝、漢朝から五代十国の時代に至るまで、皇帝を諫めて死罪に遭った者は数百人に及びましょう。しかし、宋の建国から、皇帝を諫めて罪を問われた者は一人

もいけません。少しばかりのお咎めを与えられることがあっても、その人も後には昇進を果たしました。官の上下によらず弁明も許されています。

台諫の構成員は尊卑を問われることなく採用され、その言うところが皇帝に関わる場合は、皇帝は姿勢を改めて耳に納め、朝廷に関わる場合には、宰相も罪を覚悟しました。仁宗皇帝の世には、「宰相は台諫の言いなり」と皮肉にも言われもしました。聖人の深い意図は、そのようなことを言う俗な者の知るところではありません。台諫の任に就いた者は全てが賢人であったわけではなく、その言辞の全てが正しかったわけでもありません。それでもその鋭気を養わせ、重い権限を与え続けたのは、無意味なことではありませんでした。悪だくみをする大臣が出て来るのを未然に防ぎ、中央が重すぎることによる弊害から救って来たのです。奸臣が出そうになったら、台諫が言論で挫けばいいだけです。奸臣が力を持ってし

まっぴらからでは、武力をもってしても除くのが難しくなってしまう。いま法令は厳密で、朝廷は清明で、いわゆる奸臣は万に一つも出てくることはありません。しかし、猫を養うのは鼠を除くため、いまは鼠がいらないからといって、鼠を捕える能力のない猫を養うべきではありません。犬を飼うのは泥棒を防ぐためです。いまは泥棒がいらないからといって吠えない犬を飼うべきではありません。陛下におかれましては、上は祖宗がこの官を設けた意味を考えられ、下は子孫の万世の防ぎのために何が必要であるかを考えられて、朝廷の紀綱で台諫よりも大きなものはないと御理解いただきたいのです。

——えーと、いまなにを論じているのかわからなくなってきたので、ちよつと確認すると、皇帝と王安石が一緒になって暴走しつつあるので、それを止める仕組

みがないと、とんでもないことになってしまうと、そういうことがいいたいのかな？

㊦ その通りです。王安石は、台諫の構成員から改革に批判的な者はずすということを進めつつありました。例えば、范仲淹はんちゆうえんの子の范純仁はんじゆんじんが8月に台諫からはずされました。范純仁はその父に似て、自分の考えを敢然と貫く人で、早くから王安石に批判的でした。暴走を止めるブレーキがなくなり、好き放題をする鼠ねずみないしは泥棒になりつつあると、私は王安石を批判したのです。

わたくし 臣が幼小の頃に長老の談じるところ聞き、皆がこのように言っていました。

「台諫の言は、常に天下の公議に従うものだ。公議の与くみするところに台諫もまた

与する。公議が撃つところは台諫もまた撃つ」

英宗の治世の初めに、英宗の真の親をどのようにに祀るべきかという議論が湧き起こりました。皇帝が過ちをしたわけでもないのに議論が過熱し、儀礼の決まりがそもそも明確ではなかったことから、人々は不安を感じ、公議は一つにまとまりませんでした。当時の台諫は死を覚悟してその議論に関与しました。

今はそのときどころではないほどに議論が沸騰し、怨みや誹りさえ次々に起こっています。しかし、公議の所在は自ずと知れるところであり、ところが、台諫は顔を見合わせて何も言おうとしないので、朝廷の内外の人々は失望しました。台諫が公議に反するところを弾劾してその権威を示したならば、凡人もまた奮い立つてありましよう。しかし、台諫が黙りこくってその権威をないものにしたならば、いかに豪傑といえどももう立つことができませぬ。臣わたくしが恐れるのは、こ

れ以降、こうしたことが習慣となって、官僚はただただ執政の手下となって、皇帝がお一人だけ孤立することです。紀綱がひとたび廃れてしまつては、もはや何が起こるのかわかりません。

——よくわかんないけど……。ここで紀綱といっているのは、たぶん、いまでいう言論の自由のようなことなのかなあ。台諫の任にある人が黙つてしまつたら、だれもものをいえなくなつてしまつてことだよ。それはいいんだけど、皇帝が孤立するつていうのはどういうこと？ 皇帝と王安石はいっしょになつて改革を進めようとしているのだから、批判は邪魔なんだよね？

ト

皇帝は遙か上に立っているという構造を前提としています。王安石に限らず

大臣の1人が国政全般を掌握して、批判する者が1人もいなければ、皇帝はただ上から眺めているだけで、国政に対して手も足も出ないようなことにもなりかねないということを言っているのです。もう少し先を聞いていただくと、わかりやすいかと思えます。

孔子はこう言いました。

「愚かな人間と一緒に君主に仕えることはできない。愚かな者は、地位をまだ得ていないうちは、これを得ていないことを患い、これを得てからは、これを失うことを患う。失うことだけを患うのなら、どのようなことでもしてしまおう」

わたし

臣はこの言葉を初めて読んだとき、極端なことを言うものだと思われ、疑問に感じました。愚かな者でも、せいぜい位に就いてそれ相応の待遇をされないのを患うに過

ぎないと思ったのです。しかし、秦の時代に、宰相の李斯リシが將軍の蒙恬もうてんにその権限を奪われるのではないかと患い思ったことから、ついには秦を滅ぼすようなことをしてしまい、唐の時代に、宰相の盧杞ろきが懷光かいこうよって罪を告発されるのではないかと患い思ったことから皇帝を誤らせて国家の大乱を招き寄せたといった事例を知るに至って、ただ自分の地位が失われるのを心配しただけのことから、ついには国を滅ぼすようなことにもなるということがわかり、孔子の言葉が少しも言ひ過ぎではないと納得したのでした。

ふだんから己の身を忘れて地位の上の者の顔を犯しても意見を言うような者こそが、国家の難儀に及んだときに、義に殉じて命を捧げる者であると、国を治める者は知るべきです。ふだんから一言も意見を言わない者が、国家の難儀に及んで何かをすると期待できましようか。人臣が全て何も言わないようになったら、天

下はほとんど危ういと言わなければなりません。

『論語』に「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」とあります。「和」と

は羹スープの中で五味合わさるようなことを言い、「同」とは水の勢いに巻き込まれて

何もかもいっしょくたに流されてしまうようなことを言います。

漢の時代の孫宝そんぼうはこう言いました。

「周公は古代の偉大な聖人で、同じ時に召公しやうこうは偉大な賢人であった。互いに悦ば

ないところがあり、それぞれに規範となるべきことを示し、しかし、互いに攻撃

し合うようなことはなかった」

晋の時代の王導おうどうは当時の大元老でありました。王導が客人と話す時、一同の者は

必ず「まことに結構でございます」と称賛おうじゆつしました。王述だけはそうしたことを

悦ばず、「古代の聖人の堯や舜でなければ、何をしても常に結構ということはあり

得ない」と言ったので、王導は襟を正して王述に謝りました。

もしも言うことにおいて同じでないことがなく、思うところにおいて合致しないことがなく、一方が唱えれば他方が賛同するのであれば、見かけ上、賢人同士ということにもなりましょう。そこに下らない人間が入り込み、褒め合いの中に加わったならば、上に立つ君主は、賢人と下らない者との見分けがつかないでありますように。

わたくし
臣が願くば紀綱を存するようと申し上げるのはこのようなことからあります。

もしも私が都に来て、王安石の改革を絶賛したならば、どうなったでしょうか。改革が本当によければ、もちろんそれでいいのでしようけれど、それでも、言論

がただ一色に染まってしまふのは危険です。私と王安石がまさしく「一方が唱えれば他方が賛同する」という関係になることを、王安石は期待していたのでしよう。そうなれば、頭が固い老人連中は改革に反対するけれども、気鋭の若手は改革に邁進するという構図が出来上がり、王安石が後に宰相に昇進した際に、私が副宰相になるということもあり得たろうと想像できます。私がかもしも出世には何をやるのがいいのか素早く計算する人間であったなら、都に来てすぐに王安石を絶賛し、王安石と私とで互いに褒め褒めし合う関係を作って、2人でもって皇帝の絶大なる信頼を得たでありますよう。

——でも、トバー君は大きな流れに乗るタイプじゃないんだよなあ。サーフィンでも、波の選びかたがなんかユニークだったりするしね。

㊦ 以上で三つのことを論じた本体部分は終わりです、ここから後書きという感じになります。

臣わたしは、新しい政治に単に難癖を付けて異論を唱えようというのではありません。

近頃実施された幾つかの施策は、陛下の神算の至明より出て、乾剛けんこうの必断による

もので、議論も尽くされていますので、臣わたしも敢えて物を申すようなことはいた

しませんでした。そして、ここに献じました三つの論議は、臣わたしだけの私見では

なく、朝廷の内外の人々も憂慮しているところのものであります。

古の聖人であった舜も、偉大な君主であった成王も、漢の高祖も、晋の武帝も、

手厳しい批判の言辞を受けたことがありました。必ずしも当たらないところがあ

っても、採るべきところを採って、批判した人を罪に問うことはありませんでした。それは美談として史書に記録されています。

わたくし臣が献じました三つの議論が、いまの朝廷においては全く当たるところがないということであれば、天下にとってはまことに幸いであり、その幸いを天下に示すことにわたくし臣が寄与したということになります。もしも万に一つでも当たるとに似たところがありましたなら、陛下はきっとお氣付きになるであります。

わたくし臣がこのようにいたしますのは愚かというよりありません。虫けらのごとき身をもって、雷神の威光に対峙するようなこと、狂ったような愚かさを積み重ね、それは断じて赦されるものではありません。罪が大きいとされれば、胴と首が場所を異にし、一家は破滅となりましょう。罪が小さいとされましても、官員から放逐され遠くに流されて路頭に迷う身となりましょう。しかし、陛下はきっとそ

のようにはなさらないうでありましよう。なぜなら、臣わたくしが生まれながらに愚かの
 至りで、自分の考えだけに凝り固まっている者であることを、陛下はよくよく御
 存知であるからです。先に臣わたくしは科挙と学校の制度を改めようとする大臣の考え
 に反することを申し上げました。その時すでに遠く流罪となることを覚悟し、自
 分の身が保たれるとは思っていませんでした。ところが、陛下は臣わたくしの議論に
 も然るべきところがあるとされ、曲げて御前へのお召し賜わり、穏やかにお話さ
 れた後で、臣わたくしにこのようにおっしゃいました。

「近頃の政令の可否はいかがであろうか。朕の過失であっても指摘してよろしい」
 臣わたくしは即座にお答えいたしました。

「陛下は天からお知恵を授かり、文武にわたってその縦横の才能をお具えてござ
 います。明察においてお困りになることはなく、励勤においてお困りになること

はなく、英断においてお困りになることはありません。お困りになることがもしあるとしたら、政治の達成の速さをお求めになり過ぎるところ、有為の人を用いようとするのが鋭過ぎること、言論を広く聞こうとされ過ぎるところでありましようか」

このように申し上げましたところ、陛下はそれぞれに当てはまることにはどのようなことがあるのかとお尋ねになりました。臣わたくしがお答えすると陛下は逐一頷かれ、このようにおっしゃいました。

「そなたが指摘してくれた三つの困る点を朕はこれより熟思するとしよう」

臣わたくしの狂ったような愚かさは今回のこの意見書だけではないのです。陛下はかつて臣わたくしの狂愚を許容して下さいました。始めに許容して下さい、終わりに許容して下さい、それではないと、それを恃みに、懼れずにこの意見書をお出しする

次第にございます。

臣わたくしの懼れるところは別にあります。臣わたくしへの批判はすでに多く、臣わたくしを仇と怨む者もすでにたくさんいます。必ず臣わたくしを誇り、厳しい法を適用せよ、嚴罰を与えよと言ひ、陛下が臣わたくしを赦そうとしてもできないようにしてしまうのを臣わたくしは懼れます。

いかに危うくとも、臣わたくしは死を辞するものではありません。最も恐れるのは、臣わたくしが重罪になったのを天下の人々が見て戒めとして、ものを言う者がもういなくなってしまうことです。

このようなことを考え、この月日は、日夜この文章に取り組み、書き上げては棄てるということ何度も繰り返しました。陛下が先に灯籠の件で臣の一言を聴いて下さったことに感じ入り、考えて考えて断念すべきではないと、ついにこの議論

を申し上げるに至りました。

陛下にお願いいたします。臣わたくしのこの愚忠を憐れみ、これを提出いたしましたことをどうかお赦し下さい。平伏して罪を待ち、憂恐ゆうきょうの至りに勝たえません。

——そっかあ、本当に相当の覚悟をして提出したんだね。さつきもそういつてたけど。まさに渾身の勝負手だったんだ。ちよつと感動したかも……。

でも、ボクってやっぱひねくれ者だから、話を聞いて素直に、すごいねえってほめほめするようなことがなんかできないんだよなあ。そういう器用さがあったら、もつとフツーに生きられるだろうけど。

ちよつといま考えたんだけど、ボクが皇帝で、いまの意見書を受け取ったと想像してみて、やっぱ感動するのかなあって思うと……たぶん、ちがうんだ

ろうなあ。

どういうことかっていうと、さつき聞いたけど、トーパー君には代案がないんだよね。皇帝は一大決心をして改革に着手したんだよね。始めてみたら、あれこれあれこれいわれて、どうもまずいかもってことになって、代案もないのにストップしたら、もう二度と改革なんてできなくなってしまうんじゃないのかなあつて、皇帝ならさつきと思うよね。さつき、トーパー君は、間違いだとわかったら、すぐに変更するのが真の君主だみたくないことを書いていたけど、「そうだ、その通りだ」ってんで、改革を止めたとしてだよ、しばらくしてから、トーパー君かだれかが改革の新しい案を出して、今度こそやろうじゃないかと始めてみて、やっぱりさつきとまたごちゃごちゃいわれるよね。何かを変えようとする、必ず文句をいうヤツが出てくるじゃん。そんなもって、真の君主として、今度もまたとりや

めるってことをしたら、結局、いつまでたつても改革なんてできないよね。

そういうことを考えると、代案がないのに反対するのは、いくらそれが説得力のある議論だとしても、結局のところ何も変えたくないからだけじゃないのって、皇帝としては思っちゃうんじゃないのかなあ。

意地悪なようだけど、そんなことを想像したりしちゃうんだ。

ⓧ もしも王安石本人がこの場に来てくれたら、いまのあなたの意見に大きくうなずくでありましょう。非改革派の中には、あなたがおっしゃる通り、何も変えたくないだけの人も相当数いたと思われます。王安石としては、それは絶対に許せないの、とにかく反対する者は全て同じ穴のむじなとして一掃してしまおう考えたのでしよう。

あなたとしては、王安石自身の見解を聞いてみたいところでしょうけれど、そういう訳にもいきませんので、王安石の詩を三つほど紹介して、その代わりということにしたいと思います。

——えーと、それでもいいんだけど、トバー君の意見書に対して、王安石はどのように反論したの？ それを聞かせてくれたらわかりやすいんじゃないのかなあ。

㊦ 私は意見書を皇帝に差し出しました。王安石がそれに対して反論するという構図にはなっていないのです。皇帝は高いところにおいて、私の考えを聞き、王安石の考えを聞き、様々な意見を聞いて判断を下すのです。基本的に、皇帝の前で

重臣同士が意見を衝突させて言い争うということはありませんでした。そういうことも皆無ではありませんでしたが、見苦しいこと、避けるべきこととされていきました。

王安石の詩を紹介するのは、王安石が改革に取り組んだ背景に何があったのか、少しばかり知っていただくと思うからです。王安石は私よりも15年早く生まれ、22歳で科挙に合格しました。神宗皇帝に召されて改革について意見を述べたのは48歳のときで、それまでの20数年間は、主として地方官僚として過ごし、都で仕事に就いたのはごくわずかな期間だけでした。自ら地方官僚であることを望んだからです。

これから紹介する三つの詩はいずれも地方官時代のものです。

いにえ

古の聖人の時代には立派な制度が整い、

聖人自らが土地や富を民衆にきちんと分配していた。

後の世においては、古の通りではなくなり、

土地や富の集中によって貧窮する者が生じた。

そうした不平等を民衆が強いられただけでなく、

国の統治もその現状にひきずられて成り立つものとなってしまった。

皇帝が財産家の婦人を特別に褒め称えたり、

国庫に献じた富の大小に応じて官僚として採用したりした。

私はそうしたことを残念に思い、

土地と富が公平に分配されることを願い続け、

その大きな志が実現しないことに苦しみ、

ちっげけな一官僚として汲々として過ごして来た。

ある荒れた州に三年の任期で来てみると、

餓えた幼児が町の市場をさまよっていた。

私はあちこち巡り歩き、財産家の蔵を開かせて、

身寄りのない人々を救おうとした。

山や谷の奥まった村に行くと、

まともな蓄えのある家は百軒に一軒もなかった。

大きな農家でさえもそんなありさまで、

小さな農家は生きて行くすべさえないのだった。

聞けば、この州の土地は、昔はよく肥え、人々はよく耕して、

豊かに稔っていたという。

他の州では怠惰な者が貧窮に陥ることがあっても、

この州では誰もが豊かであったというから、

貧富を分けるのは勤勉と怠惰であることが明確だったのである。

古の聖人は根本を見極めて国を治める制度を作ったのであるから、

それを軽んじではならない。

願わくば、農業を勧める古の聖人の詩を書き記して、

お上の聡明さを呼び覚ましたいものである。

——えーと、いまの詩をボクなりに整理すると、人々が困窮しているありさまを見て、貧富の差が勤勉と怠惰の違いから生じているのではなく、富と土地の不公平な分配に起因しているのであるから、昔のよき時代の制度にもどせということ

をいつているのかな。詩だから、必ずしも事実を踏まえて歌っているわけでないだろうけど、昔がホントにどれだけよかったのか、ボクは疑わしく思うなあ。さつきも、伝統がいいとは思わないといったけど。だからといって、未来に向かってよくなっていくとも思わないけど。

それはそれとして、富と土地の集中によって階級が分化し、金持ちのために政治をしている現状に怒って、皇帝を目覚めさせたいといっているところには共感するかも。いまの日本で、個人の努力ではどうすることもできないような格差が広がってきているよね。ダメなのは自己責任だというのは、強い立場にある者にとってつごうのいい言い方なんだよなあ。それと、地方の衰退だ。ちよつと旅行してみるだけでも、地方が厳しいという現実を切実に感じるよ。この町なんかは、駅の周辺にはいつも人があふれ、この店だって今日もほぼ満席だけど、うちの町

なんかよりはずっと名の知れた町でも、駅前が閑散としているなんてことがざらなんだもの。王安石は地方官僚としてずっと過ごしてきたということだから、そういう現状がよくわかっていて改革に踏み切ったということなんだね。

㊦ 王安石に限らず、儒学の伝統的な歴史観では、古代の聖人の時代を理想の世として捉えていました。王安石が立案した改革のプログラムは、古代の制度を復活させるということを旗印として掲げていました。しかしながら、実際に古代にどのような制度があったのか必ずしもはっきりわかっていたわけではありませんし、宋の時代に古代の制度がそのまま再現されるべくもないのは明らかでした。改革への批判の声が激しくなると、王安石は古の聖人の権威を借りて批判を封じるといふ手段を取るようになり、改革の是非をプラクティカルに論じる道が閉ざ

されてしまったのは残念なことでありました。

いまのは王安石が山がちの州に赴任したときの詩で、次は海辺の州での詩です。少しだけ説明をしておきますと、中国において塩は長らく国家の専売品でした。塩は人間の暮らしになくてはならないものであることから、塩に税金を課けると国は大きな収入を得られます。国が税収を増やすために塩の税率をやたらと高くすると塩の価格が高騰して、その裏側で闇の塩がこっそり取り引きされるようなことになります。そうなると闇の関係者に莫大な資金が回ってしまうので、国は厳しく取り締まるのですが、次の詩はそのことの是非を歌っています。

地方の町の役場に、お上の緊急の命令がやつぎばやに届けられた。

海中の島で密かに塩を作ることをより厳しく禁じるようになったのだ。

役人と兵士が船で島を出たり入ったりした結果、

摘発された人々がおんぼろ小屋に拘禁された。

海中の島々では作物が育てられないので、

島民には昔から生きるための労苦が大きい。

海水を煮て塩を作らなければ餓死してしまう。

捕まっておとなしく逃げないでいるような連中ではない。

それでこのごろは海賊がしばしば見られるようになり、

商人を脅し、船を沈めて殺してしまうようなことにもなつて来ている。

天下において一人一人の人民の生命はまことに重い。

君主はわずかばかりの利益を巡って人民と争って、

人民を死に追いやるようなことをしてはいけなのだ。

——密売を厳しく摘発すると、今度は海賊になったりするから、手加減しなさい
つてことをいつてるのかな。それでいいのかな？

㊦ 王安石の思いは、民衆に自由に密売をさせろというわけではありません。民衆を厳しく取り締まって搾取したり、民衆を盗賊にして民衆同士で悲惨な争いをさせたりするのは君主の為すべきことではなく、君主と民衆がともに栄えるようなことを目指すべきだというのは王安石の基本的な姿勢でした。この詩では言及していませんが、君主と民衆の間に割り込んで、利益をさらってしまいう連中がいて、その連中にとって都合がいいように政治が運営されているのを、王安石が問題視していたのです。

——その問題意識はたぶん正しいよね。ボクは、当時の社会の仕組みはぜんぜんわかっていないんだけど。それで、王安石はどのように改革しようとしたのか、ちよつと興味が湧いてきたかも。

㊦ 改革の中身に踏み込むと、かなりわかりにくくなってしまふので、ごく単純に抽象化すると、大地主や大商人に流れてしまっている利益を国と人民が分け合うことができるよう、様々な仕組みを構築する法をたくさん用意したのです。いづれも古代の制度の復活であるということの名目としていました。そうした制度によつて大きな打撃を受ける大地主や大商人は、当然のことながら改革に強く反対しました。

——ん？ ということは、トバー君が改革に反対したのは、大地主、大商人の側とつて有利になるってことじゃん。それじゃあ、なんだかがっかりなんだけど。だったら、ボクは断然、王安石側に立つってことになっちゃうよ。

㊦ 先に申し上げた通り、非改革派には様々な立場の人がいて、様々な主張がありました。

これは以前にお話したことですが、科挙に合格して官僚になった者は、その人自身が大地主、大商人になることを特に志向していなくても、あるいは不法行為をする意図などはさらさらなくても、官僚に許された特権を行使することで、官僚の一族ないし本人が大地主、大商人になるということはよくあり、官僚の一族

ないし本人が脱法行為に手を染めるというのも残念ながら皆無ではありませんでした。ですから、大地主、大商人にとって打撃となる改革に多くの官僚が反対するのはごく自然の流れでありました。

私もすでに特権階級に入った身でしたから、そうしたことと完全に無縁であったと自信を持って言うことはできません。しかし、「同胞兄弟見殺しか」の歌に呼び覚まされて都に來ましたので、民衆のためになる改革を求めていた点では、王安石と同じであったと自分では思っています。私が問題にしたのは、改革の進め方でした。弟が問題にしたのは、新法に種々の不具合があることでした。私達には王安石ほどの構想力がなく、大きな代替案を提示することができませんでしたが、より改善された改革はいかにあるべきかという議論が展開して行くことを期待していたのです。そのための反対だったのです。しかし、単純に改革に賛

成か反対に二分されて、改革派は力をもって非改革派をねじ伏せようとしたのでした。

——そういうことなら、トバー君の考えにも理解できる部分があるのかも。それで、いままでとは正反対に、ボクがトバー君の立場だったらって考えてみると、死を覚悟して意見書を書くなんてことはきつとできないから、トバー君ってやっぱすごいってことなのかも。だって、このときトバー君は34歳だったんだよね。いまのボクとほとんどおんなじだよ。ひねくれ者のボクとしては、時流に乗るのはいやだけれど、改革は必要なんだからという論理で、改革派の末端にちんまりおさまるということを選択するかも。つまり、それがラクそうだからということだ……。

えーと、ゼンゼン関係ないかもしんないけど、ちよつといま思い出したからい
うんだけど、ひのはらしげあき日野原重明さんていうお医者さんがこの前105歳で亡くなったよ
ね。それで、叔父さんからこんなことを聞いたんだ。叔父さんとこのデイにきて
いる利用者さんなんだけど、老人ホームに住んでいる人で、あるとき、老人ホー
ムのスタッフの人に、「日野原重明さんはとても立派な方でしたよねえ」みたいに
話しかけたんだって。そしたら、「僕はそうは思いません。僕だってあの人みたい
に才能があれば、こんなところでこんな仕事はしていませんよ」って、不機嫌そ
うに答えたんだって。利用者さんは、なんか悪いことをいってしまったのかなっ
て、がっかりしたというか、悲しい気分になって、黙ってしまったんだって。こ
れって、どう思う？

Ⓣ よくはわかりませんが、そのスタッフに何かしら屈折した思いがあつて、それを刺激してしまったのでしょうか。日野原さんをお手本にもつとちゃんと仕事をしなさいって、批判されたと受け止めたのかも知れないですね。

——自分だつて才能があれば日野さんのように活躍できるはずなのに、そうではない現実がいやでいやでたまらないんだろうなあ。そういう心理はわからないでもないけど、「こんなところでこんな仕事をしてる」とか思っていたら、たぶん日野原さんの100倍の才能があつても、ろくなことができないよね。ボクも「こんなところでこんな仕事をしてる」って思ったことがあるから、その反省でいうだけだよ。「こんなところでこんな仕事をしている」とあからさまにいうスタッフに助けられて生活している利用者さんって、悲しすぎるよね。

それで、ボクにもトバー君のような才能があつて、トバー君と同じような立場にあつたら、ボクも堂々と意見を述べるかつていうと、あんまし自信はないんだよなあ。あんましじゃなくて、ゼンゼンだったりするかも。

㊦ 王安石の三つ目の詩は、これも海辺でのものです。

お上の仕事で青海原の上に出て、

ある島が目に入って来たところで船を止めさせた。

島がまるっきりの秃山になっていた。

これには何かわけがあるのかと尋ねると、

土地の人がこのように教えてくれた。

昔はこの島にも木々が繁り、

山の上で一匹の猿が「キー」鳴いた。

もう一匹の猿が「キー」と鳴き、

二匹は一緒に遊ぶようになった。

やがて子が生まれ、

子孫がたくさんが増えて行った。

山には木や草がたくさんあったから、

食べられる実や根が容易に見つかった。

猿達は山の絶頂を極め、

曲がりくねった谷の奥にも入り込み、

実や根を取って食べた。

猿達はどんどん肥え太り、

山は少しずつ痩せて行った。

猿は腹を満たすために実や根を争うようになり、

木や草を保全しようとして相談する暇はなかった。

大きな猿はまだまだわしは安泰だと思っていたが、

小さな猿はすでに危ういと憂いていた。

こうして山は長年にわたって噛み尽くされ、

一本の木、一本の草も残らないまでになってしまった。

山を自在に駆け巡ることで猿は人よりも優れている。

しかし、鋤や鋤を使うことではそうではない。

食べる物をもっぱら木や草から取るのであるから、

常に自然から盗むことばかりをしているのだ。

海中の山であるから、

四方を見回して、猿はどこに移ることもできなかった。

生きるとはかような営みであるとしたら、

人もまた安易に一年一年を送って行くのでいいのだろうか。

——いまの詩は、潜在する危機に目をそむけ、現状に甘んじていると、ついには破局にいたってしまおうというたとえ話？ 生態学の話聞いてみたい気がする。ホントに900年以上も前の詩なの？ 地球全体の運命を暗示していると読めなくもないよね。

㊦ 今夜の話はここで終わりとしましょう。いまの詩の最後の句を原文で言うと、

歳晚将安謀（歳晚 さいばん 将 まさ に安 いず くんぞ謀 はか らん）

です。一年の終わりに何を考えたらいいのかと嘆いたのです。

今年もあと数日です。来年はどのような年になるでしょうか。いまは先の見通せない時代であるとよく言われます。しかし、先が見通せるような時代がかつてあったのかというと、そういうことはなかったような気がします。恐らく、改革を始めたときに、王安石には明確に先が見通せていたのでしょう。王安石ほどには頭脳が明晰でなかった我々は先が見通せなくて反対したということであったのか知れません。

皇帝に意見書を提出してどのようなことになったのか、帰郷の旅に間に破廉恥な商行為をしたと告発されたようになったのか、それらは次回の続きといたしまし
よう。

* * *

イノ君と「抽象的にわかりやすく」ということを話した後で、ネットで検索してみたところ、今野浩氏の『すべて僕に任せてください―東工大モーレッツ天才助教授の悲劇』（新潮社）という本に、次のような記述のあることがわかった。孫引きでコピ。へすると、

「数学と応用数学のもう1つの大きな違いは、*“抽象性志向”*と*“具体性志向”*である。東大工学部を代表する数理工学者森口繁一教授が、ある工学上の問題に

ついで東大数学科の看板教授吉田耕作氏に相談を持ちかけたときのことである。話を聞き終えた吉田教授は、「済みませんが、もう少しわかり易く抽象的に説明して頂けませんか」と曰ったという。『あれには驚いたよ』という森口教授の言葉が今も懐かしく思い出される」。

私も同じく森口教授自身から話を聞いた。そして、やはり「あれには驚いたよ」と森口教授がいわれたのを私も懐かしく思い出せる。しかし、話の内容はいささか異なっている。今野浩氏は森口教授のお弟子さんであるから、本の記述の方が正しいに違いないので、私の記憶がきつとどこかでねじ曲がってしまったのだろう。

自分自身の記憶の悪さを棚に上げて、人間の記憶は誤りやすいという一般論を導き出すならば、トーパー君が世に伝わる史料と必ずしも合致しないようなこと

を時々述べるのも、900年も経てば記憶に歪みが生じてもさほど不自然ではないということであるのかもしれない。

とはいえ、蘇東坡ほどの才能があればそのようなことは決してないのかもしれない。自分にも蘇東坡ほどの才能があれば、こんなちやちなホームページに誰も読まない作品をちまちまアップするようなしよぼいことはしていないだろうと思ってもするのだが、それが傲慢な考えであるということ、今回の音声データの整理を進めている間に、1月8日に放送されたEテレの番組「わたたまドックン」を見ていて思い知らされた。

「わたたまドックン」というのは、小学生の前で2組のお笑い芸人が数分間の短いネタを披露して、どちらがおもしろかったかを小学生が玉入れて判定する番組だ。1月8日の放送には「あばれる君」が登場して、地球を救うために奮闘

しているヒーローを演じた。そのヒーローには、たった一つ、ものぐさであるというささいな欠点があるために、地球を破壊しようとする敵が大暴れする様子を、ベッドに寝転んだままテレビで眺め、さかんに悲憤慷慨するのだった。仲間が苦戦していると知ると、ケータイで厳しく叱責し、いよいよ自分も何かしなければと、敵のボスに向かって電話で「やめる」といつてやろうと決心した。ただ、ケータイを使うと自分の番号が敵に知られてしまうのを恐れ、家の固定電話の子機を持って来てくれと、ベッドの上からママに頼むのだった。別の部屋にいるママにはその声が届かず、ヒーローのせつかくの決意も虚しく終わるというストーリーであった。

僕がヒーローなら、ベッドの上でごろごろなんかしていないと、「あばれる君」演じるヒーローを笑うことはできない。現実世界において自分は地球を破壊する

行為と少しも戦っていない。王安石が詩に詠んだ猿とどこも違わないのだ。